勞賃は勞働の割引された限界産物によつて定まるといふ本章で述べた學説は、多數の人々にとつては、實生活の問題から縁の遠い、ぼんやりとした抽象論のやうに思はれるであらう。勞賃一般に關する理論は總て、縁遠い諸勢力や漠然とした諸結果を取扱はねばならない、それは必然に非現實性の外觀を呈するのである。一部分はこの理由のために、多數の經濟學者は概括論を下すことを差控へてゐる。しかし此の缺點は、大きな經濟現象の窮極原因に關する殆ど總ての學説に内在するのである。産業的生活の詳細との關聯の同じやうな外見的缺乏は、利子は限界生産力と限界貯蓄との間の關係によつて定まるとか、流通媒介物の數量は物價の一般的高低を決定するとか、國際需要の均衡は種々の國の種々の貨幣所得および物價平準を決定するとか、いふ命題にも現れてゐる。すべて此等の命題は、なるほど徐々に進み且つ漠然と現れる傾向を述べたものではあるけれども、直接の且つ實際的の事實を摘出してゐる。他の諸學説もそうであるが、勞賃の一般的平準に關する本章の學説は窮極の諸勢力を考察してゐる、そしてそれ等は、一般所得率を高めんとする努力においては必ず調査し考量されねばならぬ諸勢力そのものである。全括的な且つ大きな所得增加は、私有財産制度の下では、生産力が增進し、限界が高められ、割引が資本の蓄積および競爭によつ　減少される場合に限つて現れ得る。ところが、生産的限界を高め割引歩合を低減せしめる事情は總て、勞賃を高める傾向がある、そして結局のところ、所得の一般的增加を齎し得るのは斯かる方法だけである。

かゝる條件の下で大群の人類の生活狀態が大いに改善される見込があるであらうか？　合衆國における普通勞働に對する普通の勞賃率は、第二十世紀の初め十年間では、一年に八百弗そこ〳〵であつた。之は、野蠻人よりも遙かによく、また大部分の人々が殆ど總ての時代および國において得ることができたよりも遙かに多額であつた。しかし其れは、より幸運な少數者に生甲斐ありと思はれる生活に必要なよりも遙かに少額である。それだけでは、單なる物理的必要物以上には殆ど餘裕がない、すなはち、閑暇を得、自發的の活動を爲し、教養を得、個性を充分に發揮する見込は殆どない。だから、若しこれ以上に得られる見込がないとすれば、私有財産制度は、啻に防禦的なるのみならず久しくは防禦され得ない地位に立つことになる。しかし、も少しよい狀態は決して私有財産制度と兩立し得ないわけではない。前諸頁で考察した諸勢力の影響によつて、殊に工藝的技術の進歩のために、勞賃は次第に騰貴するだらうと思はれる。過去一二世紀間における技術の進歩は偉大であつたが、將來においては恐らく更により偉大であらう。そして個人主義的および資本主義的制度の主たる强みは、それが産業的進歩を

ば、それに對立する集産主義の制度よりもより有効に促進するといふことである。資本主義的制度が、何時かは大群の人々の間に、他のどの形の産業組織の下で得られるよりもより大きな慰安と經濟的安固との普及を齎さないであらうかどうか、といふことは少くとも未解決の問題である。

此の目的を達するためには、先づ、私有財産制度の傳統的規則および制限を大いに改革すること、および第二には、筋肉勞働者の數をば利得の見込が少しもなくなるほど速かには增加させないこと、が必要である。この二つの條件の前者は、勞働問題および經濟組織問題に關する後の二篇において考察するであらう。後者、卽ち人口問題は、以下の諸章において直ちに考察するであらう。

第五十三章　人口と勞働の供給

第一節　マルサス流の人口論——生物學によつてどの程度まで强められてゐるか。

勞働の供給は人間の數の增加に依存してゐる。人口の增加に關する問題は、啻に富の分配に關係してゐるのみならず、より廣い社會問題は言ふに及ばず經濟學上の他の諸部分にも關係してゐる。從つて、この問題を何所で說明するかについては、經濟學者達によつて遣り方が違つてゐる。本書において人口問題が考察される位置は、往々にして其れに割當てられてゐる位置よりも後になつてゐる。以下、主としては分配論に關聯して論究するのであるが、多少は本論から離れることになるであらう。

マルサス流の人口論に關しては長いあひだ論爭が行はれて來た。第十九世紀の初年にマルサス[1]は說を立てゝ曰く——低い勞賃と貧困との原因は人間の數が多いことに橫つてゐる、人口には生活資料を壓迫し且つ勞賃を低落せしめる傾向がある、勞賃の騰貴は、勞働者階級の人口增

1) Essay of Population の第二版 (1803) において、Malthus は彼れの學說をば、彼れ及び彼れの後繼者達が引續いて主張した形において述べてゐる。

加の傾向が抑制されなければ起り得ない。また其れが抑制されなければ、大群の人類の生活狀態を改善せんとする計畫は總て成功の見込皆無である。此等の理由によつて、總ての社會改造案は失敗の運命に在る、と。しかのみならずマルサスは、何か有益な抑制方法が實際に行はれるだらうとは期待しなかつた。なるほど、彼れが絶望してゐたとは謂はれない。しかし彼れの學說の傾向は、また彼れの後繼者達の見地は確かに、勞働者の數は恐らく急激に增加するであらう、そして、勞賃は恐らく生存平準の上には上らぬであらう、といふに在つた。此の實情のうちに彼れは、大群の人類の物質的福祉における總ての大改善に對する重大な障碍を——殆ど如何ともすべからざる障碍を、發見したのである。

マルサスの學說の或る部分は、彼れの時代このかた思想界に於て支持されて來た。人間は動物であつて生理學的には他の動物と同じである。そして人間の數が增加する見込に限りがないのは、他の總ての動物の場合と同じである。偶〻ダアヰンは、マルサスの人口論を讀んで、啻に人間のみならず如何なる種類の生物も無限に增加する可能性があるといふことを考へるに至つた。そして此の見地からして、住居と食物とのために絶えず鬪爭が行はれ、周圍と最もよく戰ひ得るものが生き殘る、といふ結論に達した。そこで、ダアヰンのより廣い結論は、人類に關するマルサスの見解を補ふて强くしたのである。象は百年毎に、人間は二十五年毎に、その數が二倍になる。猫は一年毎に二回或は三回六倍になり、魚類は毎季節に數百倍或は數千倍になる。ところが、その最高率で增加する種族は總て、結局は生活資料に缺乏を生ぜざるを得ないのである。

第二節　最高出生率、最低死亡率、その結果たる增加の見込。急激に增加する傾向があるといふ意味。積極的及び豫防的抑制。

人間の數の可能的增加をもつとよく觀察し、そして其れをば實際の增加率と比較して見よう。その可能的增加は、死亡數に對する出生數の可能的超過によつて定まる筈である。正常な構成の人口における最高出生率は、少くとも一〇〇〇につき四五である、即ち、人口一〇〇〇について毎年の出生數四五位ひを算するであらう。若し人口が專ら生殖年齡の男女から成つてゐるとすれば、出生率は、暫くの間は非常に高いかも知れない。若し人口が生殖年齡の者を異

常な割合で含んでゐるだけの場合(移民が絶えず流入する地方の場合のやうに)でも、出生率は矢張り可なりにより高いかも知れない。子供および老人が相當な割合で含まれてゐる正常な構成の人口の場合でさへも、四五といふ數は生物學的最高出生率以下である。その最高出生率は、恐らく一〇〇〇につき五〇位、或はもつと高いであらう。しかし、可能的增加を現實增加と比較するといふ差當つての目的のためには、確かに現れ得る數――例へば一〇〇〇につき毎年四五――を擧げるのが最上であらう。

他方において、最低死亡率は確かに、一〇〇〇につき毎年一五位ひの低さである。この場合にも亦た、正常に構成された人口を假定せねばならない。壯年の者が普通の割合以上に含まれてゐる人口は、容易により低い死亡率を示すであらう、之に反し――例へば壯年者が移住したあとはそうであるが――老人および子供が普通の割合以上に含まれてゐる人口は、最も惠まれた條件の下でさへも、かゝる低い死亡率を示すことは殊ど不可能であらう。正常に構成された人口においては、このやうに低い死亡率が確かに可能である。若し總ての豫防し得る死亡原因が廢除されたならば、卽ち、若し救治し得べき病氣のための死亡者がなくなれば、そして營養不良、不注意、非衞生的環境、に直接或は間接に起因する死亡者がなくなれば、若し死が安らかな老年においてのみ、或は如何なる注意および醫術によつても豫防し得ない病氣のためにのみ、來るならば――その場合には、一〇〇〇につき一五位の死亡數が見出されるであらう。實に、若し此等の條件の總てが實現されたならば、死亡率は確かにより低くなるであらう。實際において、之と殆ど同じ低さの死亡率を示してゐる社會がある。しかも確かにその社會でも、豫防された筈の死亡が多數にあるのである。しかのみならず、醫學は急速に進步してゐる。かくして、この二三十年間のあひだに、傳染病からの死亡率は非常に低くなつた。大人にとつて最も致命的な器管病および隋落病からの死亡率も、著しく低下するかも知れない。最低死亡率は、益〻低下するものと考へて差支ないのである(註一)。

(註一)　壯年者が流入しつゝあるところの、新しい植民地や急速に發達しつゝある都會は、一〇〇〇につき一二或は一三位ひの死亡率を示してゐる。かゝる死亡率は時として、非常に健康に宜しきを得てゐることの證據として誇示されてゐる、がそれは、(數字の不正確のためでない場合には)死亡率の最も大きな子供と老人とが普通の割合よりも少いためである。

ニュー・ジーランドの死亡率は、十年間(一八八七―一八九六)を通じて一〇〇〇につき一〇に過ぎないが、而もそれは、何も極めて例外的な年齡分配のためではない、と報告されてゐる(Newsholme's Vital Statistics, p. 88)。之は、死亡率としては非常に低いものであつて、計算に缺陷があるのではないかと思はれる。

我々が精確な狀勢を知つてゐる民族或は國のうちには、茲に述べたやうな最高出生率或は最低死亡率を示してゐるものは一つもない。しかし、我々が問題としてゐる大體の結論のためには、此等の極端について全く精確である必要はない。出生率と死亡率との間の可能的相違は如何に大であるか、そして、人口の可能的增加は如何に大であるか、といふことが分かれば充分である。若し、出生數は年々一〇〇〇につき四五であり、死亡數は一〇〇〇につき一五であるとするならば、死亡數に對する出生數の超過、卽ち人口の增加は、一〇〇〇につき三〇である。この增加率を以てすれば、人口は二十三年毎に二倍となるであらう。マルサス自身は、現實の場合において彼れが見出した――或は彼れが見出したと考へた――事實から、同じやうな可能的增加率を推定した。『アメリカの北部諸州では……人口が、一世紀半以上のあひだ引續いて〔卽ち、一六五〇年から一八〇〇年に至るあひだ〕二十五年に足りぬ間に二倍になつてゐる。』マルサスは、もつと急速な增加も起り得るだらうと、從つて、二倍になる期間は十五年位ひに短縮されるだらうと、考へた。之は恐らく、增加の可能性を誇張したものであらう。しかし、人口が今示したやうな期間のうちに――二十五年間或はその前後の年數のうちに――二倍になるだらうといふことは、確かに有り得ることである。

啻に、かくの如く急速な增加の可能性があるのみではない、かくの如く急速に增加する傾向(tendency)があるのである。茲に傾向といふのは、往々この言葉によつて意味されてゐるもの――長期間において或る一定の結果が生じるであらうといふ蓋然性――を意味するのではない。それは吾々が、自由に生產される商品はその生產出費によつて定まる價格で賣れる傾向がある、と謂ひ得る意味での傾向である。卽ち、人口がその最高率で增加する傾向があるといふ場合には、いくらか違つたことを――若し邪魔されなければ、こうした結果を生じるであらうところの諸勢力が作用してゐるといふことを――意味する。之と同じやうに吾々は、すべての物體は落下する傾向があると謂ふが、それは、事實上おそらく落下するであらうといふ意味ではなくて、何物かによつて阻止されなければ落下するであらうといふ意味である。人口增加の傾向は、生殖本能と子供に對する兩親の愛とから生じる。この本能と愛とは、普遍的な且つ有力な勢力であつて、動物のあひだでは無拘束に作用してゐる。各種の動物は、その最高率において增加せんと努めてゐる、卽ち、或る妨害原因のために增加し得ない場合でなければそうするであらうといふ意味で、努めてゐる。

しかし、如何なる種類の動物も、事實上その最高率で增加し得るものはない。もしそうした

ならば、そのうちにその動物は、他の總ての動物を押し出して地上を獨占するであらう。人間も亦この例に洩れない。人口が二十五年毎に二倍になるといふことは、決して繼續し得ないのである。かゝる增加率が久しく持續し得るのは、例外的に好都合な事情の場合に限られる。長いあひだの徐々たる開化によつて獲得した道具と知識とを有する文明國民が、突然に或る新しい土地を得た場合には、暫くは人口增加の餘地が無限にある。マルサスが增加の可能性の一例とした時代における北アメリカ植民地の地位はそうであつた。その歷史の大部分を通じての合衆國々民の、加奈陀人、濠洲人、アルゼンチン人の、地位はそうであつた。が斯かる場合は人類の歷史において稀有である。稀に斯かる場合があることは、比較的稀に或る新しい動物——或る蛾、鳥、或は哺乳動物——が、これまで見知らなかつた土地に移つて、暫くは食物にも缺乏せず餘り强い敵にも遭遇せずに增加し得ることがあるのと似てゐる。總て久しく住はれてゐる國では、人口が最高率のやうな率で增加し得ることはない。その根本的理由は、土壤からの收穫遞減の傾向のうちに見出される筈である。一定の面積においては、如何なる農產物に對しても收穫遞減の傾向がある。なるほど其れは、ある程度までは、技術上の改良によつて中和されるかも知れない。しかし、若し人口が引續き二十五年毎に二倍に增加して行つたならば、結局は、食料を得ることが益〻困難になるといふ障碍に出遭ふに違ひない。

その場合には、人口增加の傾向は邪魔されるに違ひない、そして其れは、マルサスが積極的および豫防的抑制（positive and preventive checks）と名づけたところの、二つの方法で邪魔されるかも知れない。彼れが謂ふ積極的抑制とは、既にこの世に生れ出てゐる人間の數を減少させる抑制——飢餓、疾病、戰爭、あらゆる形の不幸——のことであり、豫防的抑制とは、人間がこの世に生れ出ることを豫防する抑制のことである。前者は高死亡率を通して作用し、後者は低出生率を通して作用する、換言すれば、前者は死亡超過を通して、後者は出生制限を通して、作用するのである。

これ等の抑制の一方或は他方が作用する程度は、文明の進步の標準だと謂つても、大した間違ひではないであらう。なるほど問題は、イエス・オア・ノーの問題ではなくて、モーア・オア・レスの問題である。人類が生殖力を完全に發揮することは殆どない。極めて低い階段以上に進んでゐる社會では、必ず、幾らか出生が制限されてゐる。文明が進むにつれて、益〻先きのことが考へられるやうになる。また如何なる國民においても、積極的抑制もまた幾らか作用してゐる。最も進步せる國においてさへも、小さな富裕階級以外では、生き殘り得る以上の子供が

生れ出てゐるのである。かくして人口は、一部分は、不必要に高い死亡率――即ち、老年および不治の病からの最低死亡率以上の死亡率――によつて制限されてゐる。出生制限が多ければ多いほど文明の程度が高いのであり、死亡超過が多ければ多いほど文明の程度が低いのである。

第三節　近代における若干國の實際出生率及び死亡率。高い出生率は通常高い死亡率を伴ふ。例外の説明。合衆國の狀態。

これ等の一般的原則を念頭に置きつゝ、若干の主要國における現代の出生率および死亡率を一瞥して見よう。次の表では、比較する便宜のために、先づ最高出生率と最低死亡率とを擧げ、その次に、若干の國における出生および死亡率を示した。『倍加期間』といふのは、その出生超過が不變的に維持された場合に、人口が二倍になるまでの年數のことである。

出生率の大きな相違に注目を要する。ルーマニアとハンガリーとサクソニーとは、吾々の假定した最高出生率よりも大して低からざる出生率を示してゐる。ところが他の諸國は、著しくより低い率を示してゐる。一番左のフランスは、ルーマニアとハンガリーとの其れの約二分の一の出生率を示してゐる。他方では、死亡率にも殆ど同じやうに著しい相違がある。ルーマニアおよびハンガリーにおける死亡率は、殆ど一〇〇〇につき三〇、即ち最低死亡率の二倍の高さである。ところが表の左端では、それが遙かに低くなつてゐる――即ちフランスでは、一〇〇〇につき二〇そこ〳〵であり、イングランドおよびスウ

出生および死亡率（一八九一――一九〇〇年に於ける人口一〇〇〇についての年平均）

	出生	死亡	出生超過	倍加期間
最高率および最低率	四五（最高）	一五（最低）	三〇（最高）	二三
ルーマニア………	四〇・七	二九・三	一一・四	六一
ハンガリー………	四〇・六	二九・九	一〇・七	六五
サクソニー………	三九・五	二四・〇	一五・五	四五
バヴァリア………	三六・五	二五・四	一一・一	六二
イタリー………	三四・九	二四・二	一〇・七	六五
イングランドおよびウェールス……	二九・九	一八・二	一一・七	五九
スウェーデン………	二七・二	一六・一	一一・一	六二
フランス………	二二・二	二一・五	〇・七	九九〇

ェーデンでは著しく低いのである。

概して、高い出生率には高い死亡率が伴つてゐる。右の表の右方における諸國では――ルーマニア、ハンガリー、サクソニー、バヴァリア、イタリーでは――すべてそうである。この、高い出生率と高い死亡率との對應は、マルサスの警告と豫言とが實際に當嵌まるといふことを意味する。かゝる國では、人口が生活資料を壓迫してゐる。生活資料が可能ならしめるよりも速かに增加することは困難である、從つて積極的抑制が作用してゐる。といつても、最も極端な形の積極的抑制ではない、出生率も最高率には達してゐない、幾らかは出生も制限されてゐるのである。しかし、生き殘つて大人となり得るよりもより多くの子供が生れて居り、且つ、安らかな老年まで生き殘り得るよりもより多くの者が大人となつてゐる。人々は衣食住に不足し、病氣の手當も不充分である。ハンガリーとルーマニアとは最もひどい狀態に在る、サクソニー、バヴァリア、およびイタリーも惡い狀態に在る。すべてかゝる國では、大群の人々の生活狀態を永久的に改善するための必要かぐべからざる條件は、出生率を低めること――生活資料に對する壓迫を緩和すること――である。

かゝる國では、死亡率は常に小兒のあひだで最も高い。最上の條件の下でも、小兒期は病氣に對して甚だ敏感な時代である。スカンディナヴィア諸國および濠洲の若干州においてのやうに、一般死亡率が極めて低い所でさへも、小兒の一割は滿一年以下で死亡してゐる。英吉利、佛蘭西、およびマサチュセッツおよびニュー・ヨークでは、一割乃至一割五歩が死亡してゐる。墺地利および匈牙利では二割以上が、露西亞では二割五歩が、滿一歳まで生きてゐない、乳兒の三分の一が死亡したといふ極端な場合もある。更に、五歳以下の小兒について見るならば、出生數一〇〇〇につき五歳までに死亡したもの、數は次の如くである(註二)。――

バヴァリアでは	三九三
オーストリアでは	三八九
イタリーでは	三七八
フランスでは	二五一
イングランドおよびウェールスでは	二四九
スウェーデンでは	二二二

出生率の高い諸國に現れるやうな小兒のあひだの高い死亡率は、明かに、生き殘り得ない子供がこの世に生れ出てゐることを意味する。それは苦惱(サフフリング)を意味するのであつて、幸福な結果の生ずる見込は決してない。生き殘つて大人になつた子供は、低い勞賃と困難な生活條件とに當面

せねばならない。しかも彼等は、更にまた早婚して多くの子供を生むのである。不幸の小車は止むところなく廻轉する。

（註二）この種の數字はどの生死統計書にでも見出すことができる。茲に引用した數字は、Newsholme's Vital Statistics, p. 130, Bailey's Modern Social Conditions, p. 224. および、the Massachusetts Registration Reports に見出され得る。比較研究のためには、合衆國の數字については、Publications American Statistical Association, December, 1910. における E. B. Phelps の論文參照。

今や他の幾つかの國について考察しよう。先づ增加率――死亡に對する出生の超過――が、英吉利および瑞典において他の諸國におけると全く同樣に高いことに注目されたい。それは年々、一〇〇〇につき約一一である。しかし出生率も死亡率も、瑞典および英吉利においてはより低い。ハンガリーやバヴァリアでは、出生率はより高いけれども、その人口は事實上より速かに增加してはゐない。それは增加せんと努めてはゐるが、しかし積極的抑制によつて阻止されてゐる。英吉利および瑞典では、こんなに速かに增加せんと努めてはゐない、出生率がより低い、卽ち、豫防的抑制がより大きな程度に作用してゐる。明かに、英吉利および瑞典の狀態は遙かにより幸福である。彼等は莫大量の避け得べき苦惱を免れてゐる。若し彼等の出生率が他國のそれ位ひに增加したならば、彼等の死亡率も殆ど確かに、略〻それに應じて增加するであらう。人口はより速かには增加しないで、只だ、別種の且つより不幸な過程を經て增加を妨げられるだけであらう。

これ等のより幸福な國では人口がかなり速かに增加してゐるが、而も高い死亡率を伴つてはゐない、といふ事實は、種々の方面から說明される。瑞典では、それは主として移民に起因してゐる。前に擧げたやうな數字は、必ずしも、諸國における人口の實際增加率を表はしてはゐない、それは、內部的增殖によつて何れだけ增加したであらうかを示すだけである。人口の最後の增減も亦た、流入と流出とに――移入民（イミグレーション）と移出民（エミグレーション）とに――依存してゐる。茲に考察した期間における瑞典からの移民は、人口に比較して多かつた。これがなければ、死亡率がより高かつたか出生率がより低かつたかであらう。蓋し、瑞典といふ國は、その人口をして其れが自然的增加のみによつて增加したであらうやうに增加せしめるやうな、そんな生產擴張の見込ある國ではない。幾つかの他の國も亦た移民において出口を見出したといふことは注目すべきである――殊に伊太利はそうである。若し多數の移民が流出しなかつたならば、伊太利においても亦た其の死亡率がより高かつたであらう、或はまた、その出生率がより低かつたであら

う。

英吉利もまた移民において多少の出口を見出した、しかしその程度は、前の數字が適用される十年間には大したものではなかつた。概して云へば、その死亡に對する出生の超過は、この國の人口の實際の增加を意味したのである。英吉利の人口が增加し得たのは、この國の生產力が人口と歩調を一にしてゐたからである。若し英吉利がそれ自身の土壤から得た原料のみでその住民を養ひ、且つ其れのみをその住民に供給してゐたならば、かゝる人口の增加は殆ど起り得なかつたであらう。しかし英吉利は大製造業國であつて、食物および諸材料をば、それにおいては收益遞減からの障碍を見ない製造品の輸出高と交換して得てゐる。この種の交換は、第十九世紀における英吉利の人口および富の增殖の基礎であつた。それが續く――しかも人口の膨脹に應じて續く――かぎりは、この國は高い出生率と而も低い死亡率とを維持することができる。この種の交換が增加しなくなれば――常に增加しつゝある食料品を加工財の輸出によつて買ふことがより困難になれば――英吉利では出生率が低くなるか、或は死亡率が高くなるか、そのどちらかを免れぬに違ひない。前者が殆ど確かに選ばれるであらう、實際、增加率の減退が既に現れてゐるのである。後に詳說するであらうやうに、すべての先進國の人口は、恐らく此の方法によつて、より大きな壓迫狀態に適應するであらう。

佛蘭西では古くから豫防的抑制が行はれてゐる。この國の人口は、數十年のあひだ事實上靜止してゐる、或は寧ろ、自然的增加によつて增加することができなかつたのである。總人口が斯くの如く僅かしか增加しなかつたのは移入民のためであつた。佛蘭西における死亡率は意外に低くない。この比較的に高い死亡率は、なるほど一部分は、その人口が暫く靜止してゐるといふ事實だけで說明されるかも知れない。蓋し、人口が靜止してゐる場合には、年齡分配において、死亡率がより高い筈の老人の割合が多いからである。しかし佛蘭西は、なるほど大きな且つ繁昌せる國ではあるが、而もその人口のうちには、生活條件が困難であつて死亡の大部分が豫防し得べき原因のためであるところの、工場勞働者および田舍民の群がある――如何なる國においてか其れが無いであらう？――といふことも亦た事實である。とは云ふものゝ、この國の出生率は概して低く、從つてその人口はその資源を大して壓迫してはゐない。殊に田舍の地方では、佛蘭西人は著しく勤儉であり、自重心に富み、將來に對して用心深い、かくして其の生活狀態は、なるほど凡ゆる點で全く滿足するに足るものではないが、しかし伊太利、匈牙利、或はサクソニーの其れよりも、遙かにより幸福であり且つ裕福である。

全體としての合衆國については、信頼するに足る出生および死亡數字が缺げてゐる。國勢調査局の示すところによれば、一八九〇―一八九九年の十年間における此の國の出生率は一〇〇〇につき三五・一であり、死亡率は一七・七である。しかし此の數字には共に疑ひの餘地がある。死亡率は、不充分な國勢調査報告書を基礎として示されてゐる、そして出生率は、不確かな死亡率が這入つてゐるところの、込入つた計算を基礎としてゐる。合衆國のやうに經濟的發達の見込ある國では、出生率は高いものと期待さるべきである、一方、一般的繁榮と安樂とは、人々をして比較的に低い死亡率を期待せしめるに違ひない。しかし、合衆國は極めて統一のない國である、從つて其の生死統計の一般平均數は、假とへそれが正確な數字に基いてゐるとしても、その價値は不確かであらう。例へば、黑人――殊に南部における――の出生率は高い、そこでは死亡率も亦た高い。黑人は、ルーマニアおよびハンガリーの狀態に似た狀態に在るのである。南部の白人も亦た、なるほど黑人のそれのやうに高くは決してないが、高い出生率と比較的に高い死亡率とを示してゐる。中央部および西部では、出生率は恐らく比較的に高く、死亡率は低いであらう。東部諸州――殊にニュー・イングランドでは、出生率が比較的に低い。かくしてマサチュセッツでは――正確な記錄が引續いて維持されてゐるのは此の州だけあるが――數十年間の出生率が一〇〇〇につき二五そこ〳〵であつた。この州では死亡率も低くて、一〇〇〇につき一七乃至一九であつた(註三)。しかし、此處でも亦た人口は同質でない、從つてこの數字には解釋を加へる必要がある。マサチュセッツには移民が絶えず流入した、それ故にこの州の人口のうちには、壯年者が並外れに多く含まれてゐる。その死亡率が低いのは一部分はこのためである。他方において、外國生れの者と土着の者とのあひだには著しい相違がある。外國生れの者のあひだでは出生率が極めて高いが、土着の者のあひだでは其れが著しく低い――この現象については聽て詳說するであらう。かくして、合衆國の相異れる諸地方の間の不同は、歐羅巴の相異れる諸國の間の不同と同じやうに大きいのである。

(註三)　マサチュセッツにおける五ケ年毎の出生率および死亡率は下の如くである、――

	出生	死亡
一八八〇年に終る五年間	二四・二	一八・八
一八八五年に終る五年間	二五・〇	一九・八
一八九〇年に終る五年間	二五・八	一九・四
一八九五年に終る五年間	二七・六	一九・八
一九〇〇年に終る五年間	二七・〇	一八・〇
一九〇五年に終る五年間	二四・二	一六・四

第四節　出生率の高低は勞賃の低高の原因となるか？　諸原因の相互作用。人口の制限は一般的繁榮および高い勞賃の原因ではなくて條件である。

高い出生率、高い死亡率、後れた產業狀態、低い勞賃――これ等は普通には相伴つてゐる。しかし何ちらが原因であつて何ちらが結果であるか？　無條件のマルサス流の見解に從へば、人口の壓迫――高い出生率によつて表はされる――が原因であつて其れから凡ゆる害惡が流れ出るのであり、從つて、唯一の有效な改善方法は出生率を低下せしめることに在る。しかし、問題は然かく簡單なものではない。

高い出生率と貧困とは、大抵の場合には相互作用的原因である。古い國では、高い出生率は普通には貧困を意味する。そして貧困は、更にまた、往々にして出生率を高くする。或る國民が貧乏であつて困窮から逃れる見込がないと思はれる場合には、その國民はやけになる恐れがある。乃ち將來に頓着なく生殖が行はれる、蓋し、將來は兎にかく絕望のやうに思はれるから。ところが、其の生殖そのものが希望の扉を閉すのである。現代においては、相互作用的原因（高い出生率と貧困と）の斯かる宿命的循環が、女子と子供との多く雇れてゐる製造業地方において往々現れてゐる――例へば、ケムニッツを中心とするサクソニーの織物業地方においてのやうに。そこでは、人口が多くて勞賃が低いために、女子や子供までが仕事を求めてゐる。ところが他方においては、仕事の得られる機會そのものが生殖を助長するのである――蓋し、家族の暮しは妻や子供の收入によつて辛じて立つて行くのであるから。かゝる狀態が確立してゐる所では、よりよき狀態に逃れ出る方法を見出すことは困難である。多產と貧困との原因が累積的になつてゐる。また、一般的條件がよい國においてさへも、普通には下層階級があるのであつて、そこでは高い出生率、高い死亡率、雇傭に對する壓迫、低い勞賃――これ等は相關聯した現象であるが、しかし何れも他の確かな原因ではない――が見出されるのである。

それにも拘らず、人口增加の抑制が改善の一主要條件だといふことは明かである。然らば、マルサス流の提案は難攻不落である。人口の制限は高い勞賃の原因ではない、しかし其れは高い勞賃を維持するための條件である。

高い勞賃は根本的には高い産業生産力に依存してゐる。なるほど、人口の增加が限られた自然的資源によつて壓迫されてゐないところの、そして資本もまた迅速に增加してゐるところの、新しい諸國においては、勞働者は、酷い條件に當面することなく迅速に生殖するかも知れない。長ひあひだ經つてからでなければ、壓迫の徵候は現れぬかも知れない。しかし、既に人口の稠密な國においては、土地からの收穫遞減のための根本的制限が常に存在する。だからして幾らか豫防的抑制を行はなくては、一般的改善を目的とする方法は何れも有効ではあり得ない。

しかし、單に豫防的抑制を行つたからとて何の効果もない。只だ、繁榮を齎すために必要な他の諸條件――技術上の改良、資本の增加、産業生産力の增大――が備つた場合に始めて、一般社會所得が、およびその所得の一部分としての勞賃が、向上の傾向を示すであらう。その場合には生殖に對する抑制が、なるほど其自體が高い勞賃の原因ではないが、高い勞賃を持續せしめるであらう。若し人口がその最高率で――或は最高率に近い率で增加するならば、高い出生率は、確かに、啻に死亡率を高からしめるのみならず、勞賃をも低落せしめるであらう。しかし、若し産業の生産力を高める諸勢力が作用してゐるならば、出生率の低下はより惠まれた條件の獲得と維持とを可能ならしめるであらう。

第五節　生活標準は勞賃をば直接にではないが人口に對する其の影響を通して影響する。この問題に對する謬論。

生活標準は往々にして、勞賃を決定する根本原因だと謂はれてゐる。或る意味では、其れは一つの根本原因である。しかし其れは、直接にではなくて、人口に對する其の影響を通して作用する。生活標準が高いからとて、それだけで勞賃が騰貴しはしない。なるほど其れは、出生率を低下せしめ或は低く維持するに役立つかも知れない、そしてその故に、條件――高い勞賃の持續が通常それに依存する條件の一つを創造するかも知れない。しかし、他の條件――實は産業の生産力が大きいために生じるところの、勞働者に對する大きな需要――が存在するに非ざれば、高い生活標準は何の役にも立たぬのである。

この問題については奇妙な謬論が行はれてゐる。多數の上層勞働者(職工等)のあひだでは、

安價生活をすると損であつて、贅澤な暮しをすれば得だといふ見解が廣く行はれてゐる。彼等の考ふるところによれば、若し彼等が節約すれば(例へば、より安價な食物を食へば)どういふわけか彼等が利用されて、彼等の勞賃が引下げられるであらう、然るに、若し彼等が『よい暮し』をすれば、彼等の勞賃は高く維持されるであらう。だからして、食料品の經濟的な使用および料理方法を提案する人々は、勞賃を引下げんとする隱れた一味徒黨だと邪推されてゐる。これより不合理な考はない。諸君の所得を以て能きるだけ多くを得る――各出費によつて最高限度の效用を獲得するやうに支出を導く――方法は、總て、繁榮を助成する諸勢力の効果を增加せしむるに役立つのである。勞働者達が得る金額は、直接には、彼等が消費する金額によつては、或は彼等の支出標準によつては、定まらない。それは一能因としての彼等の數によつて定まる、そして生活標準は、彼等の勞賃に對しては、それが彼等の數を影響する限りにおいてしか影響しない。若干の經濟學者は、この題目については、勞働者達自身と同じやうに混同を生じてゐる。彼等は生活標準をば、恰もそれが直接に作用する一勢力であるかのやうに論議してゐる、しかし其れは間接にしか作用しないのである。

この命題は、骨子においては眞理であるところの經濟學上の他の多くの命題と同じやうに、多少の制限を必要とする。なるほど、或る高い生活標準は、主としては勞働者數に對する其の影響を通じて勞賃に影響するのであるが、それは亦た契約の過程にも幾らか影響する。被傭勞働者達の勞賃の決定における第一歩は、雇主との契約である。ところが此の契約には凡ゆる種類の能因が關係してゐる、卽ち、啻に勞働組合――これについては嘗て詳說するであらう[1]――のみならず、どれだけが『相當な勞賃』(fair wages)或は『生活勞賃』(living wages)であるかに關する確定せる傳習も關係してゐる。これ等の言葉は漠然としたものであつて、住々にしては未解決のまゝである、正當な報酬或は生活に必要な報酬が何れだけかといふことに關する人々の考は、普通には、單に彼等が慣れてゐる率によつて定つてゐる。しかし、慣習上の事實は契約上の一要素となる。或る確定せる生活標準は、勞働者達をして、彼等が相應な勞賃と看做す額に對する要求に對し、より頑固に執着せしめるであらう。かくして或る高い生活標準は、市場の駈引によつて定まる範圍内では、勞賃額に對して幾らか直接に影響するかも知れない。

なるほど高い生活標準は、出生率が低くなつてゐる所で現れるものであつて、困窮に陷つてゐる人々のあひだで確立することは困難であるが、その標準を高めることの困難は、昔の學者達の多くが想像したほど大きいものではない。彼等は、眞實の向上は或る突然の引上げによつ

1) 第六篇第五十七章參照。

てのみ生じるものであり、新たなる習慣が確立するには時日を要するものだと考へた。この見地からすれば、前途の見込には殆ど望みがなかつた。何となれば、社會的および物質的條件における突然の變動ほど生じにくいものは無いからである。幸にして此の見解は、最近の歴史の示すところによつて根據のないことが分つた。こゝ數十年のうちに、比較的に進んだ諸國においては、生活狀態が徐々に且つ漸次に改善され、そして其れにつれて出生率が徐々に且つ漸次に低下して來た。すべての先進諸國では、出生率が低下すると共に、死亡率が尙一層低下しつつある。この變動は、富裕階級のうちで(譬て示すであらうやうに)最も明確であるが、しかし勞働者階級の上層においても、また僅かにではあるが勞働者階級の下層においても、現れてゐる。それは漸次に、總ての階級および總ての國を影響しつゝある。それは、より大きな繁榮の原因であると共に結果であり、また、より高い生活標準の原因であると共に結果である。それは、歳月の經つにつれて益〻重大な結果を生じるだらうと思はれる。

第六節　近代の出生率低下が起つた方法。

すべての文明國における出生率は、第十九世紀の中頃以來低下を示してゐる。かくして英吉利においては、それが一八五〇年から一八六〇年に至る十年間においては一〇〇〇につき三五であつたが、一九〇〇—一九〇五年においては一〇〇〇につき約二七となつた。佛蘭西では同じ期間において、それが一〇〇〇につき二六から二一に低下した。獨逸では、これほど著しく低下してはゐないが、然し矢張り明かに低下してゐるのであつて、三六或は三七から三三或は三四となつた。合衆國においても、第十九世紀を通じて同じやうな變動の起つた證據がある(註四)。換言すれば、この國ではマルサスが豫防的抑制と呼んだものが適用されたのである。しかしその變動は、マルサスが忠告し且つ期待したのとは違つた方法で起つた。マルサスは、結婚期を遲らせること、從つて年を取つてから結婚することを希望した。若しそうされたならば、結婚し得た筈の者が多少死ぬるからして結婚率が低下するであらう。しかし乍らその變動は、結婚延期が極めて著しいものに非ざる限りは微々たるものであらう。出生率も亦た幾らか低下するであらう、蓋し、生殖能力ある結婚生活の期間が短縮するし、また、年を取つてからは生殖力が減退するから。しかし、マルサスの希望した結果が生じたのは、此の測定し得べき生理學的影響によつてゞはなかつた。その主たる原因は、自然的な且つ生物學的な過程を故意に妨害することであつた。大抵の國における結婚率は、なるほど僅かに低下する傾向は見ゐるが殆

ど變動してゐない。それは通常、一〇〇〇につき八そこ〳〵であつて、佛蘭西においても、獨逸においても、英吉利においても、殆ど同じである。而も此等の國における出生率は甚だしく相違してゐる。また、平均結婚年齢も殆ど變動してはゐない。殆ど總ての國において減少する傾向があるのは、なるほど國によつて相違はあるが、一結婚についての子供の數である。尤もなるほど、佛蘭西におけるが如く、それが最低限度に達して丁度死亡數と均衡してゐる場合には、最早減少する傾向はないけれども。この一般的狀態――結婚率は事實上變動しないのに出生率が低下してゐること――は生殖を故意に控へるがためだ、といふことには何等の疑問もない。夫婦は、故意に、以前よりも少數の子供しか有たぬのである。この傾向は、或る國では他の國でよりも著しい。例へば、新教國では舊教國でよりも著しい。それは、富裕階級の間では貧乏階級の間でよりも明かに現れてゐるが、しかし其れは、總ての階級に擴つて行きつゝある。それは、一般人口問題に關するところの、および社會的成層の問題に關するところの、幾つかの大問題を惹起する。次章においては此等の問題に向ふであらう。

（註四）この問題に關する數字はどの統計摘要においても見出すことができる。綿密な論議と選擇せる數字とを求めるならば、Mayr: Statistik und Gesellschaftslehre, III Band, SS. 113–114 を見よ。また合衆國については、Publications American Statistical Association, 1911, No. 2. における W. F. Willcox の論文參照。キルコックス教授は、合衆國における出生率の低下は近頃に始まつたものではなくて、一八〇〇年以來引續いて來たものだといふ驚くべき事實を發表した。尙また、Journal Royal Statistical Society, 1906, pp. 34, 88. における二つの歎賞すべき論文參照――その一は Newsholme 氏および Stevenson 氏の手になるものであり、その二は Yule 氏の手になるものである。

第五十四章　人口（續き）

第一節　諸々の社會的層の間の出生率上の相違と種々の生活標準に對する其の關係。

諸々の社會的階級或は諸々の無競爭の群のあひだには、出生率および死亡率において、種々の國のあひだの不同に劣らぬ著しい不同がある。ところが一國内における相違は、諸國の間における相違よりも寧ろ一層意味が深い、といふのは、其のために、社會的成層の性質、および生活標準と一般所得率との間の關係がより一層明かになるからである。問題の此の部分に對する統計的證據は比較的に貧弱である、他方において、日常生活の觀察は、その一般的狀態を闡明する上に餘程の足しになる。

先づ、統計的證據の性質を考察しよう。結婚は、富裕階級の間においては、勞働者階級の間におけるよりも遲れて行はれる。獨身男と獨身女との（卽ち初婚の）平均結婚年齢は、一八九〇年における英吉利（グレイト・ブリテン）では次の如くであつた。[1]——

1) Journal Royal Statistical Society, 1890, pp. 274—275. における Ogle のよく引用される數字。

	獨身男	獨身女
鑛夫	二四	二二・四
工匠	二五・三	二三・七
店主	二六・六	二四・二
專門家および獨立業者階級	三一・二	二六・四

たが專門家および獨立業者階級では一五一人に過ぎなかつた、といふ事實によつても示されてゐる。

結婚年齢が高いといふことは、それだけで、富裕階級の間における出生率を低下せしめる傾向がある。しかし其の出生率は、この事情のみによつて說明されるよりも遙に低い。伯林においては、細密な調査の結果、最も貧しい町における既婚婦人は、最も富める町における既婚婦人の略〻二倍だけの子供を生んでゐること、および、出生率と富の程度とのあひだには常に逆の關係が見られること、が分つた。一九〇〇年における姙娠年齢（一五—四五）の既婚婦人各一〇〇〇に對する出生數は次の如くであつた、——

最も貧しい町においては	二三六

同じ事情は尙ほまた、同時代の英吉利においては、結婚者各一〇〇〇人のうちで二五歲以下のものが、鑛夫の場合には七〇四人であつ

その次に貧しい町においては……二一二
その次に貧しい町においては……一九一
その次に貧しい町においては……一八〇
その次に貧しい町においては……一六一
最も富める町においては……一二七

この種の直接の（既婚婦人數と出生數とのあひだの）比較を爲し得る場合は多くはない。しかし、姙娠年齢の婦人（既婚および未婚）の總數と比較すれば出生數が貧乏人に多くて金持に少い、といふことは屢々證明されてゐる。この結果は、今言及した調査によつて獨逸における總ての都市に現れたゝかくして、一例をとるならばハムブルグでは、姙娠年齢（一五—四五）の婦人一〇〇〇についての出生數が、最も富める町においては五九であり、最も貧しい町においては一五一であつた。歐羅巴の種々の都市における出生數（一五—五〇歳の婦人一〇〇〇についての）の、より古い且つよく引用されてゐる統計は次の如くである、——

	バリー	ベルリン	ウヰーン	ロンドン
極めて貧しい町	一〇八	一五七	二〇〇	一四七
貧しい町	九五	一二九	一六四	一四〇
安樂な町	七二	一一四	一五五	一〇七
極めて安樂な町	六五	九六	一五三	一〇七
富める町	五三	六三	一〇七	八七
極めて富める町	三四	四七	七一	六三

ボストンでは、全市の平均出生率が、一九〇〇—一九〇四年においては、二七（住民一〇〇〇につき）であつたゝところが、主として金持の住んでゐる區域では其れが一〇〇〇につき一三に過ぎず、貧乏人の區域では其れが一〇〇〇につき二八乃至三六であつた。そして新たに移住して來た伊太利人の集つてゐる區域では、それが四六であつた（註一）。

（註一）ベルリン及びハムブルグについての數字は Mombert, Studien Zur Bevölkerungsbewegung in Deutschland, pp. 149, 150. から引かれてゐる。Mombert の著書には、種々の國に對する此の問題に關しての凡ゆる證據の秀れた通覽がある。バリー、ベルリン、等についての數字は Bulletin de l'Institut Internat. de Statistique, Vol. XI, Part 2, p. 163. における Bertillon のものであり、ボストンに關する數字は Wolle, The Lodging House Problem in Boston, p. 128 からである。Bertillon の數字の如きは相違を誇張してゐる、蓋し、富める町には多數の未婚婦人の召使がゐるのであつて、その存在は、姙娠年齢の婦人の總數と比較しての出生率を低下させるからである。

合衆國における出生率が、外國生れの者の間におけるよりも土着の者の間において遙かに低いことも、同じ現象の一部分である。土着の者は概して、所得がより大きく、且つ社會的地位がより高い。ミンガンにおいては、一八七〇—九五年の二十五年間では、一五—四五歳の婦人一〇〇〇についての子供の數が、土着の婦人の場合には約一二〇で（一一一から一二七の間を動搖しつゝ）あり、外國生れの婦人の場合には約二三〇で（二二一から二三五の間を動搖しつゝ）あつた。

種々の死亡率に關する同じやうな數字を求めることは容易でない、しかし、其れが無くとも事實は明白である。貧乏人のあひだの——殊に乳兒および小兒の死亡率がより高いことは、餘りに痛ましく卑近な事實である。貧乏な町には必ず子供が群集してゐる、そして貧乏な町では必ず、生き殘つて大人になる見込が富裕階級の町におけるよりも少いのである（註二）。

（註二）次の數字は一九〇三年における倫敦のものである。それは、倫敦の人口を群に分けて出生および死亡率を表はしたものであつて、第一群は最も貧乏な群であり、第六群は最も富める群である（この場合の貧富の標準は、雇つてゐる召使の數の割合である）。生出についても死亡についても、未修正率と修正率とが掲げてあるゝ未修正率は人口一〇〇〇についてであつて、修正率は結婚條件の不同と年齢上の群による人口の分配とを斟酌したものである。

	未修正出生率	未修正死亡率	修正出生率	修正死亡率
第一群（最貧）……	三五・〇	一八・四	三一・六	一九・一
第二群……	三八・三	一四・四	二五・八	一五・〇
第三群……	二六・〇	一四・六	二五・六	一五・三
第四群……	二五・九	一二・一	二五・五	一二・七
第五群……	二五・一	一四・八	二五・三	一五・五
第六群（最富）……	一八・二	一三・〇	二〇・四	一四・六

既に言及したところの、Journal Royal Statistical Society, 1906, p. 71. における Newsholme および Stevenson の手になる論文參照。

かゝる不同は、生活標準における相違の證據であり且つ結果であるゝ、そして其れは、同じやうな不同が種々の國における生活標準に對して有するのと同じ關係をば、諸々の社會的群のあひだの生活標準に對して有つてゐる。或る一定の群における報酬が低い理由は、その群における人數が、其の齎す勤勞に對する需要に比較して大きいといふことである、換言すれば、その群の成員達の限界效用或は限界可賣力が低いからである。[1] しかるに或る群における人數の多少

1) 第四十七章第一、第二節參照。

は、その群における生殖の程度によつて定まる。なるほど、雷にこの素因によつてのみではないゝ群から群への移動が行はれる、そして殊に、より高い階級における人數はより低い階級からの流入によつて幾らか增加する。しかし概して云へば、各々の群はそれ自身の成員から補充される。確かに、最も低い群、卽ち不熟練勞働者の群においては、人數の增加は殆ど專らその群の內部から生じる。日雇勞働者の勞賃が低いのは彼等の數が多いからである、そして彼等の數が多いのは、勞賃が低いにも拘らず、彼等が依然として結婚し且つ生殖する——而も概して早く結婚し且つ速かに生殖するからである。

この場合にも亦た、生活標準と勞賃との間の關係は、直接ではなくて間接である。富裕階級が安樂な生活に慣れて居り、且つ安樂な生活の持續を欲してゐるといふ事實だけでは、收入は大きくはならない。しかし、醫師、辯護士、建築技師、機械技師、上層の實業家、の數が比較的に少いといふ事實——これは、此の階級の所得を高く維持するために役立つてゐる。下等勞働者の勞賃が低いのは、彼等が粗惡な食物及び面白くもない生活に慣れてゐるからではない、彼等の勞賃が低く維持されるのは、かゝる不快な條件にも拘らず依然として彼等の數が多いからである。——生活標準、出生率、勞働者の供給、および最後に收入、の間には相互關係があるのである。

生活標準は、人數に對する窮極の影響を通して勞賃を影響するのではなくて、勞賃を或る一定の點に決定するものだとも——生產費が諸商品の長期間の價値に對して有するのと同じやうな或る決定的勢力を有するものだとも——考へることができる。かくして、或る一定の群は——例へば上層の筋肉勞働者卽ち機械職工および熟練職人の群は——或る特定の生活標準を有つてゐて、收入がかくして定まつた額を超過すれば速かに生殖し、また、收入が其れ以下に下れば生殖を抑制するものとも考へられる。しかし斯かる考へ方は、極めて漠然と且つ不確實にしか事實に當嵌まらない。豫想され且つ計算される報酬率以外の事情も、結婚および出生を影響する。純粹な經濟的動機の影響は不規則であり、往々にしては半ば意識されてゐるに過ぎない。それは恐らく、生殖を增加するためにより生殖を抑制するために役立つであらう、それは恐らく、勞賃を騰貴から阻止するよりも其れを下落から支持するであらう。或る一定の群の成員の勤勞に對する需要が增加して其の群の勞賃が可なり騰貴したからとて、必ずしも、出生率が高くなり、人數が內部から增加して、其の騰貴が阻止されるだらうとは考へられない。寧ろ恐らく勞賃の騰貴は、外部からの流入によつて——他の群の者が此のより有利な職業に轉す

ることに成功することによつて――或る限界内に保たれるであらう。啻に人口一般についてのみならず、そのうちの諸々の階級について云つても、高い生活標準は高い收入の維持される原因だと謂ふよりも其の條件だと謂ふ方が、より安全である。

第二節　出生率低下の一般的傾向の主因は社會的野心である。それと私有財産制度および個人主義との關係。合衆國における土着民および移民からの例證。

先進諸國における出生率の一般的低下、富裕階級の間におけるその低下の强大、繁榮が益々普及するにつれて此の傾向が益々すべての階級に普及するであらうといふ蓋然性、否な殆ど確實性――すべて此等は、主として社會的および產業的野心に起因してゐる。若干の學者は此の變化をば、恰も其れは自動的であるかのやうに、恰も富裕階級の間の出生率低下は彼等がより大きな所得を有することの自然の且つ必然の結果であるかのやうに、論じてゐる。しかし、所得と出生率との間の關係はその反對である、所得の增加は、出生率低下の原因であるよりは、寧ろその結果である。出生率低下の根本原因は、各家族がそれ自身の物質的福祉を增進せんとする欲求である。マルサスは、各人が自分の生活狀態を改善をせんとする願望をば、社會の救濟力だと謂つた。確かに人口の增殖に關聯しては、彼れの謂ふところは眞理である。生活改善の見込が幾らかでも觀取されるならば、報酬のよい職業、敎育、幾らかの貯金および幾らかの財產、が得られそうに見ゐるならば、扶養すべき子供の數が增せば增すほど斯かる機會を利用する見込の減少することが分つたならば――その場合には、生殖の傾向が益々抑制されるであらう。出生率低下の原因は、前世紀を通じて西洋文明國民を驚くべく刺戟したところの、智的および物質的勢力――敎育の普及、新聞および書物、鐵道および汽船による移動の低廉、新たなる雇傭方法によつての、大規模生產および工場制度によつての、移住を通しての變動によつての、沈滯せる人々の皷舞――において見出される筈である。勿論これ等の勢力の總てが絕えず同じ方向に作用したわけではない。工場制度は、なるほど長期間においては矢張り覺醒的且つ鼓舞的效果があつたが、時には頽廢的效果しかなかつたやうである。佛蘭西、合衆國、西部獨逸においてのやうに、土地所有權が廣く散布せる所、或は借地條件が安固な所では、農民が、

新たなる機會に對して最も確實に應答した。ところが東部獨逸、英蘭、南部伊太利、墺太利、および匈牙利においてのやうに、農業勞働者が土地から分離されてゐる所では、彼等は、改善の形勢に醒めるためには他の世界からの――移住を通しての――刺戟を必要とした。兎にかく何處においても、生活標準を向上せしめたものは個人の醒めたる野心であつた。

マルサスが人口問題に關して著述するに至つたのは、茲に夢想的計畫に對する如何ともすべからざる困難がある、と信じたからである。彼れの後繼者達は常に、人口が生活資料を追越す傾向は社會主義への一障碍だと主張した。この障碍は如何ともすべからざるものではないかも知れない、しかし社會主義的社會においては、確かにそれは、現代社會において實際に現れてゐる方法とは甚だしく違つた方法で打勝たれねばならぬであらう。一方においては、不平等並びに、より高い經濟的および社會的階級の卑近な光景。他方においては、自分自身および自分の子供のための利己心の刺戟――これ等は、人口の增加を制限し、向上心を刺戟し抑制を命じ、且つかくして物質的福祉の增進と普及とを支持したところの、諸能因である。そして個人主義がこの現象の土臺となつてゐる。

すべて此等の個人主義的勢力は合衆國において最も强く作用した。他の何處にも、機會のより以上の自由はなく、個人的野心に對するより以上の刺戟はなく、教育からの及びより大きな見込の意識からのより以上の鼓舞はなかつた。だからしてこの國では、人口增加の壓迫が危險を前兆するやうな地方および社會的階級においては、その壓迫が緩和され始めたのである。

例へばニュー・イングラントでは、土着人の人口は久しく極めて徐々にしか增加してゐない。なるほどニュー・イングランドの總人口は引續いて可なり增加してゐる、しかし其の增加は、絶えざる移民の流入の、および外國生れの兩親の大きな出生率の、ためである。土着の婦人の生殖力と外國生れの婦人の生殖力との間の著しい相違は、既にミシガンに關聯して注意した。マサチュセッツでは其れがもつと著しい。外國生れの婦人のあひだの出生率は、土着の婦人のあひだの出生率の三倍であつて、次の數字の示す通りである(註三)。――

年々の出生率

	一八八三―一八八七	一八八八―一八九二	一八九三―一八九七
土着の兩親……	一七・一	一七・一	一七・〇
外國生れの兩親……	四八・四	四九・六	五二・一

（註二）in Quarterly Journal of Economics, Vol XVI. pp. 143, 146, 183. に於ける R. R. Kuczynski から。Publications American Statistical Association, September 1905. における A. A. Young が New Hampshire について發表せる同じやうに顯著な數字參照。

この數字は未修正出生率（人口一〇〇〇についての出生數）を示したものであつて、この二つの階級の生殖力の相違を誇張してゐる。蓋し、外國生れの者のうちには、生殖年齢の者の割合がより大きいからである。しかし、姙娠年齢の婦人の數に比例しての出生數を比較して見ても、外國生れの者のあひだの增加率は土着の者のあひだの其れの二倍であつて、その數字は次の如くである。——

一四—四九歳の婦人一〇〇〇についての出生率

	一八八三—一八八七	一八八八—一八九二	一八九三—一八九七
土着の母……	六三・七	六二・八	六二・六
外國生れの母……	一二四・五	一三三・六	一三九・四

この數字を擧げた注意深い統計學者の結論（一九〇一年における）に從へば、マサチュセッツの土着人口はその數を維持してはゐなくて、若し一八八三—一八九七年のあひだに現れた出生率が何時までも續いたならば、土着人はゐなくなるだらう、とのことである。疑もなく其れは何時までも續きはせぬであらう、土着人の數が安定するやうな——否な恐らくは幾らか增加するやうな、狀態に復するであらう。しかし、低い出生率は殆んど確かに何時までも續くであらう。

合衆國の中部地方の土着農民のあひだでも、なるほどニュー・イングランドにおいてのやうに著しくはないが、增殖率の低下が矢張り現れてゐる。此處では、亦た、一夫婦の間の平均子供數も減少する傾向がある、蓋し兩親が、その子供の社會的および經濟的地位をば、啻に維持せんとのみならず引上げんと切望してゐるからである。

この變動は着々と擴つてゐる、そして其れは、啻に通常より特別の意味で『土着』であると思はれてゐる人々のみならず、移民の子孫達をも同じく漸次に影響しつゝある。制度の自由および機會の自由の影響は、社會的諸階級のカストライクな（如何ともすべからざる印度の階級制度のやうな）性質を減少——否な恐らくは打破する筈である。それは、合衆國に移住して來た人々の子供達をば、最低の無競爭の群から引上げる。そして此の子供達のあひだでは、彼等の兩親のあひだでは高かつた出生率が低下し始める。合衆國において下等勞働者および不熟練工場勞働者の報

酬率が低く維持されてゐるのは、その國内での出生率が引續いて高いからではなくて、外國から來る勞働者達の出生率が高く且つ生活標準が低いからである。絶えず最下層を補充する澤山な人間が生れてゐるのは歐羅巴諸國においてゞある。が一旦彼等が合衆國に移住すると、社會的および經濟的向上心の酵母が徐々に然し確實に彼等を影響する。そのために人口の增加率が殆ど確實に緩和される。そのうちに、自然的資源がより完全に先買され、そうして增加の可能性がより古い國の諸條件に支配されるやうになるにつれて、マルサス流の困難は、殆ど疑もなく、益々豫防的抑制を適用することによつて避けられるであらう。

第三節　豫防的抑制は餘りに行はれ過ぎてゐるか？　優生學と民族自滅。

先進諸國、および殊に、斯かる國における繁昌せる諸階級が今日當面せる問題は、豫防的抑制が餘りに行はれ過ぎではないだらうか、といふことである。全體としての佛蘭西の人口は、只だその數を維持してゐるに過ぎない。佛蘭西の富裕階級は、或はその數を全く維持し得ないかも知れない。マサチュセッツの土着人口は、多分その數を維持し得ないであらう。疑もなく之は、この州の富裕階級の間の場合のことである。この現象の主因は、社會的向上心の超過――臆病なまでの用心――である。本當の生活樣式が何であるかに關する人々の考は、絶えず、より嚴重になつてゐる、しかも、從來の程度で家族を扶養するための費用は、より大きくなつてゐる。そこで結婚は比較的に年をとつてから行はれる、また全く結婚しない人の割合も可なりに大きい。財産がある場合には、相續財産が餘り多數の者のあひだに分割されてはいけないからとて、子供を多く生むことが避けられてゐる。極めて富める者は、就中最も徐々にしか生殖せぬやうである。

この傾向には弊害が伴つてゐる。それは、競爭および壓迫から來る刺戟の一部分を無くしてしまふ。餘り注意深く育てられ、餘り骨を折つて敎育され、餘り充分に相續財産からの扶持を保證されてゐる子供は、勇氣を缺いでゐる。また、精神過勞の生活をした兩親の――殊に晩婚の兩親の子供は活氣を缺いでゐるやうに思はれる。より早く結婚し且つより迅速に生殖し、そして生まれた子供のことは殆ど構はないで置く人々の階級は、恐らくより進步的であらう。

更に、より繁昌せる諸階級は、智的の天分を有する人々が最もよく現はれる諸階級である。彼等が繁昌してゐるのは、概して云へば、彼等が斯かる天分を有するからである。疑もなく、

生殖が著しく制限されてゐる恵まれた階級のうちにも、凡庸の徒が澤山にゐる。しかし其のうちには、有能な且つ賢明な者も澤山ゐる。だからして富裕階級における出生率低下の傾向には、人口の質が低下する危險が伴つてゐる。天分のある者がより少くしか生れない、而も生れた者は、其の天分を充分に發揮すべく活潑な競爭によつて刺戟されることがより少いのである。他方において、より低い階級の人々は最も迅速に生殖する。なるほど彼等のうちからも幾らかは高能者が現れるが、その大多數は凡庸であり、而も次々に凡庸の子供を生むのである。また、その並外れの才能によつて出世し得た少數の人々は、繁榮階級を支配してゐる社會的向上心と禁止とに負けて、その新しい仲間と同じやうに、澤山の子供を生まなくなるのである。

近年になつて、動物を繁殖させるための吾々の注意と、人間を繁殖させるための吾々の不注意との間の奇妙な對照に、益々思が致されるやうになつた。人類は、若し肉體的および精神的天分の貧弱な者の繁殖が阻止されたならば、質において莫大に改良され、そして、其の幸福な生活を營むための能力が莫大に增進され得るであらう。しかし、繁殖を選擇することがどの程度まで可能であらうかといふことは、極めて不確かである。遺傳といふ明白な事實には間違ひはないけれども、遺傳法則の詳細は――殊に人間に對する其の應用においては、漠然としか分つてゐない。そのうちには、謂ゆる優生學によつて――即ち、選擇と繁殖とが可能なつもりで先天的および後天的特性を代から代へ傳へんとする組織的研究によつて、もつとよく分つてくるであらう。現在の知識狀態では、何等の個人差を生ぜしめることも出來ない。また、どんな條件によつて非常な才能を有する者が生れるかといふことも分つてはゐないのである。また假りにより精確な知識が得られるとしても、制限および選擇の制度は、總て恐らく、進歩を求める向上心の精髓であるところの、機會の自由と個人的發展とを求める努力と矛盾するであらう。かゝる制度にして、窮極の人種的改善といふ冷い而も遠い理想のための、無數の人々によつての現在の幸福の犧牲を意味しないものが有るだらうとは仲々考へられない。現在のところでは、極端な場合にこの原則を極く制限して適用することだけが、可能の範圍内に在るやうに思はれる。或る種の罪人および窮民は、自分と同じやうな子供しか生まない、だから社會は、その成員を保護して、かゝる寄生動物を扶養し且つ警戒する負擔を繰返させないやうにする權利と義務とを有する。また或る種の病氣と病毒とは遺傳される。だから其の傳達に抑制を加へることは、兩親たるべき人々に對しても生れ出づべき子供に對しても慈悲である。これ以上には、吾々が考へ得る如何なる社會組織の下でも、人間が熟慮の上その成員の一部分を選んで、

その部分の人々のみが人類を永續せしめる特權を有するものとするであらう、といふ見込は殆どない。

謂ゆる『民族の自滅』("race suicide") に對しては餘りに重きを置いてはならない。富裕階級の間における抑制への傾向の程度は、往々にして誇張されてゐる。より高い階級の全滅を脅すの點にまで抑制が行はれることが有り得ないわけではないが、しかし大抵そんなことはないであらう。なるほど斯かる階級では、迅速な繁殖と大きな家族とは有りそうなことではない。しかし、その數の維持および可なりの增加は、決して無さそうなことではない。幾らかは、彼等の生活を左右する理想に依存するであらう。詰まらない野心、野卑な誇示の愛着、人爲的卓越の誇張——すべて此等は、結婚における躊躇と子供を儲けることにおける臆病とを助長する。ところがより高い理想と向上心とを有する者は、より早く妻子を持ち、また、產兒制限はあまりにしないのである。

他方において、繁殖に對する抑制のよい方面も忘れてはならない。全體としての人類について云へば、出生率の低下と人口に對する壓迫の減少とは、退步ではなくて進步を意味する。すべての階級のあひだで深慮の習慣が廣く行はれることは、人類の幸福の增進を意味する。恐らく時が來れば、この種の深慮がずつと進んで、先進社會の人口は最早少しも增加しなくなるであらう。その場合には、低い出生率は低い死亡率によつて埋合され、免れ得る苦惱や病氣は最低限度に減少し、平均死亡年齡はより高くなるであらう。進步はその場合には多分より少くなるであらう、或は少くとも、違つた結果を伴ひ、違つた刺戟の下で、違つた方向に進步するであらう。生產技術が引續き發達してならない理由は何もなく、また、智的および道德的生活が向上してならない理由は確かに何もない。急速に增加する人々の鬪爭と競爭とは、幸福のために必要かくべからざるものではなく、また、靜止的人口への接近は、其れだけでは不幸の原因ではない。靜止狀態においても——初期の經濟學者中での最も博識なヂョン・ステュアト・ミルの能辯な言葉を引用するならば——『依然として、あらゆる種類の精神修養、および道德的並びに社會的進步の餘地が、生活方法を改善する餘地が、そして暮しの術に心が奪はれなくなれば其れの改善されるより大きな見込が、あるであらう。……只だ、正しい社會制度が行はれてゐる上に、人類の增加が賢明な豫見の思慮ある嚮導の下に置かれた場合に始めて、科學的發見者達の智力および精力によつて自然の力から作られた諸々の征服物が、人類の共同財產となり、從つて、普遍的運命を改善し且つ向上せしめるの手段となり得るのである』。[1]

1) Political Economy, Book IV, Chapter VI, § 2.

第五十五章　不平等とその原因。相續。

第一節　不平等の事實——分配は大體ピラミッドの形をしてゐる。プロシヤの、英吉利の、倫敦の、所得の分配を示す數字。

財産および所得の分配における普き事實は不平等である。その不平等は如何に大きいか、また其の原因は何であるか？

この問題に對する吾々の知識は、極く近頃まで驚くべく貧弱であつた。それは今尙ほ、仲々以て完全でも正確でもない。吾々の知識は、主として所得稅報告書を基礎としてゐる、しかし其れは、少數の國のがあるだけであり、そして其れも修正と説明とが必要である。とは云ふものゝ、啻に不平等の事實を確めるためにのみならず其れの程度および性質を示すためにも、吾々の手に在る數字によつて援助し且つ補充すれば、卑近な觀察で充分である。富豪の數が極めて少いといふこと、富裕階級の者の數も、なるほど富豪の數よりは多いが、矢張り少いといふこと、および、僅かの所得しかない人の數が就中最も多いといふことは、吾々の知れるところである。やがて注意する筈の唯一の重要な例外と除けば、分配は——富のも所得のも共に——大體ピラミッドの形を示してゐる。もつと注意して類例を擧げるならば、その形は獨樂に似てゐる*——卽ち最低部では小さく、それから極めて大きくなり、そして其後は最高點に近づくにつれて段々に小さくなつてゐる。

二三の典型的な數字を擧げれば足りるであらう。大國の個人間の所得の分配を示すもので最良の租稅統計は、一九一四—一九一八年の戰爭前の時代におけるプロシヤの其れであつた。[1] 次の數字は一九〇八年のものである。この時代のものなれば、大抵どの年のでも同じ結果を示すであらう。

プロシヤの總人口三八、〇〇〇、〇〇〇人のうち一八、〇〇〇、〇〇〇人（納稅能力者（タックスペイヤー）八、三三〇、〇〇〇人）以上は、所得稅によつては影響されなかつた、蓋し、幾多の納稅能力者の所得は免稅額——九〇〇麻克[2]以下だと見做されたからである。免稅額以上の所得を有するために課稅することができ從つて課稅されたものは五、八七二、〇〇〇人であつた。此等の人々の間では、所得は次のやうに（概數で）分配されてゐた。——

* 一四一六頁の圖參照。
1) 第八篇第六十九章の所論參照。
2) 此の數字を考察する際には勿論戰前の貨幣的尺度を顧慮せねばならない。

納稅能力者

五、二八四、〇〇〇人即ち九〇　%の所得は……　九〇〇乃至　三、〇〇〇麻克
四一一、〇〇〇人即ち七　%の所得は……　三、〇〇〇乃至　六、五〇〇麻克
七六、〇〇〇人即ち一・三　%の所得は……　六、五〇〇乃至　九、五〇〇麻克
八三、二〇〇人即ち一・四　%の所得は……　九、五〇〇乃至　三〇、五〇〇麻克
一八、〇〇〇人即ち〇・二五%の所得は……　三〇、五〇〇乃至　一〇〇、〇〇〇麻克
三、八〇〇人即ち〇・〇五%の所得は……　一〇〇、〇〇〇麻克以上

若し富裕階級の者と然らざる階級の者との間の分界線を三〇〇〇麻克のところに引くならば、納稅者のうちで富裕階級に屬する者は約一〇パーセントに過ぎぬことになる。注意すべきは、この數字は、所得稅圈内に居り且つ實際に所得稅を課せられた人々のみを勘定に入れてゐる、といふことである。この外に、大體これと同じくらひの多數の者が、免稅額以下の所得を得てゐたのである。總家族數のうち富裕階級に屬したものは約五パーセントであつた。[1]

英吉利（グレートブリテン）の所得稅[2]は、それによつて英吉利における所得の分配の特色についての――差當つての目的のためには充分精確な――見積りを立て得る材料を提供してゐる。次の數字は一九〇四年のものである、――

一六〇磅以下の所得を有する家族數……六、七七五、〇〇〇
一六〇乃至七〇〇磅の所得を有する家族數……八三〇、〇〇〇
七〇〇乃至二、〇〇〇磅の所得を有する家族數……一二二、〇〇〇
二、〇〇〇乃至五、〇〇〇磅の所得を有する家族數……三二四、〇〇〇
五、〇〇〇乃至五〇、〇〇〇磅の所得を有する家族數……一四、二〇〇
五〇、〇〇〇磅以上の所得を有する家族數……三五〇

この結果を他の方法で言ひ表はせば斯ういふことになる――四三、〇〇〇、〇〇〇の人口のうち、約五、〇〇〇、〇〇〇は年に一六〇磅或はより多くの所得を有する家族に屬し、そして此の五、〇〇〇、〇〇〇が英國民の總所得の約半分を有して居り、一家族について一六〇磅以下の所得を有する殘りの三八、〇〇〇、〇〇〇が總所得の他の半分を有してゐるのである。かゝる數字は嚴密な正確を自任することはできない。現存の不平等を防禦し且つ辯明せんとする人々の見積りに從へば、通常、極めて大きな所得を有する者の數が減少し、中程の所得を有する者の數が增加してゐる。その詳細な計算は、統計學者達には興味あり且つ重要なことであるが、しかし大觀といふ目的のためには殆ど何うでもよいことである。右に引用した數字は、先進諸國における所得の分配の不平等を示すものとして、充分信頼するに足るものである(註一)。

1) Schmoller : Grundriss der Volkswirthschaftslehre, Band II, SS. 139－140 における彼の見積り(1899年に對する)參照。
2) 第八篇第六十九章第三節參照。

（註一）右の數字は A. L. Bowley 氏によつて提出（統計的精確を保證されてゐはないが）されたもの――それは Report of the Committee on Income, Tax, Parl. Doc. 1906, Vol. IX, p. 229 に見出される――から引用したものである。余の、一六〇磅以上の所得の數字の組合せは、Bowley 氏のとは稍々相違してゐる、また余は、一六〇磅以下の所得を有する總家族數に關する Chiozza Money 氏の見積りを追加した。分界線をこの點（一六〇磅）においたのは、それ以下の所得は免稅されてゐるからである。Chiozza Money: Riches and Poverty (1909) p. 41, and passim, および、今擧げた英國議會報告書――それには澤山の報告がある――參照。

總ての國に就ての統計的報告の有益な概略が、相續いで刊行されてゐる Handwörterbuch der Staatswissenschaften の "Einkommen" の項下に、Robert Meyer 博士によつて寄稿されてゐる。

チャールス・ブース（Charles Booth）氏によつて利用された分配丈量の基礎は全然別種のものである。彼れの倫敦に關する大研究において、彼れは、所得に關する直接の報告を知ることができなかつたゝめに、召使を置くといふ標準――明かに意味深き標準――を賴りとした。召使を置いてゐない階級と置いてゐる階級との間には大きな分界線がある。また後の階級においては、召使の數によつて更に分割される。倫敦の人口の五分の四（八〇、一パーセント）即ち總て三、三七二、〇〇〇人は、召使を置いてゐない階級に屬することが分つた。召使を置いてゐる上層階級の者の數は四七六、〇〇〇人、即ち人口の一一パーセントであつた（その殘りの九パーセントは、召使達自身、および旅館や下宿屋や學校病院等に住んでゐる人々、および此の方法では容易に分類され得ない他の人々、を包含してゐた）。そして此の上層階級は、毎戸の召使數によつて數組に分割され得ることが分つた（右の表參照）（註二）。

	人數	人口の百分比
召使を置いてゐる階級、合計……	四七六、二五〇	一一・〇
その内分		
イ、一人の召使を置いてゐる階級……	二二二、〇〇〇	五・五
ロ、二人の　〃　……	一四四、〇〇〇	三・四
ハ、三人の　〃　……	五七、七〇〇	一・三
ニ、四人の　〃　……	一八、八〇〇	〇・四
ホ、五人の　〃　……	一三、三〇〇	〇・三
ヘ、六人の　〃　……	七、一〇〇	〇・二
ト、七人の　〃　……	三、〇〇〇	〇・一
チ、七人以上の　〃　……	四、三五〇	〇・一
一人も召使を置いてゐない階級……	三、三七二、〇〇〇	八〇・一

（註二）Life and Labour of the People of London, Second Series, Vol, I. p. 5 seq. (edition of 1903). 簡單にするために、余は、イ組は召使一人を置いて居り、ロ組は召使二人を置いてゐる、といふ風に記述した。ブース氏

の綿密な研究においては、ロ組は、召使二人を置いてゐる大家族と共に召使一人しか置いてゐない若干の小家族を包含して居り、ハ組は召使三人を置いゐる大家族と共に召使二人しか置いてゐない若干の小家族を包含して居り、以下すべて斯くの如くである。

直接の觀察を基礎として、ブース氏は倫敦の人口を次の如く分類した、——

	人數	人口の百分比
イ、（最低の階級）……	三八、〇〇〇	〇・九
ロ、（極めて貧困な階級）……	三一七、〇〇〇	七・五
ハ、および二（貧困な階級）……	九三八、〇〇〇	二二・三
ホ、および（安樂な、勞働階級）……	二、一六六、〇〇〇	五一・五
ヘ、（より低い中產階級）……	五〇〇、〇〇〇	一一・九
ト、（最高の階級）……	二五〇、〇〇〇	五・九

これ等の數字は、分配は完全にピラミッドの形をしてゐるといふ說に對する例外——一寸前に仄めかしておいた——を示すに役立つ。それがピラミッドの形をしてゐるのは、只だ最下層達するまでだけである。最下層では、人數はその前の層におけるよりも多くはない。倫敦の人口における最大の單獨成分をなしてゐるのは、極めて貧困な階級ではなくて、比較的に安樂な勞働階級である。若し、所得稅統計が誤つてゐるのであつて、實際九〇〇麻克の所得を有する多數の者が其れ以下の所得しか有たぬものと見做されてゐるとするならば、プロシャにおいても矢張り斯ういふ狀態だらうと思はれる。若し吾々が、英吉利、佛蘭西、合衆國、のやうな先進國における所得の分配に關する信頼すべき報告を得たならば、恐らく、最低階級に關しては之と同じ結果が見られるであらう。

第二節　財產の分配——英吉利における遺產檢證、プロシヤにおける租稅統計、によつて示されてゐるやうな。

財產所有權の分配に關する狀態は、骨子においては之と同じである。一組或は二組の數字によつて充分に例證されるであらう。英吉利の相續稅は、同じ基礎に據つて多年のあひだ注意深く管理されて來た、尤も稅率は前後を通じて同じではなかつたが、それを見れば長期間のうちには、種々の大きさの財產を有する人の數が分かるのである。一八九九—一九〇〇會計年度か

ら一九〇八―一九〇九會計年度を通じての十年間について見ると、平均して、毎年次のやうに財産(不動産)が檢證されてゐる(註三)、――

五〇〇磅以下の小さな財産	四八、〇〇〇
五〇〇―一、〇〇〇磅の財産	九、九三三
一、〇〇〇―一〇、〇〇〇磅の財産	一六、四八四
一〇、〇〇〇―二五、〇〇〇磅の財産	二、三一一
二五、〇〇〇―五〇、〇〇〇磅の財産	九一一
五〇、〇〇〇―七五、〇〇〇磅の財産	二八六
七五、〇〇〇―一〇〇、〇〇〇磅の財産	一四〇
一〇〇、〇〇〇―一五〇、〇〇〇磅の財産	一三五
一五〇、〇〇〇―二五〇、〇〇〇磅の財産	八八
二五〇、〇〇〇―五〇〇、〇〇〇磅の財産	五一
五〇〇、〇〇〇―一、〇〇〇、〇〇〇磅の財産	一八
一、〇〇〇、〇〇〇磅以上の財産	七乃至八

(註三)　余は右の平均をば、最小の財産を除けば總て、Statistical Abstract for the United Kingdom に多年のあひだ載せられた數字から計算した。最小の財産については、右の Statistical Abstract は、一〇〇磅以下の財産は勘定に入れてゐないので、總計を示してはゐない。右に示した數字(表における第一行の數字)は概數であつて、統計的に精確ではないゝしかし差當つての目的のためには充分精確である。

プロシヤについても、補完税(Ergaazuagssteuer)――所得税報告書に基いた、しかし所得に關してゞはなくて財産に關して課徴された租税――と結びつけて、同じ種類の數字が發表された。一九〇八年においては、概數一、五〇〇、〇〇〇人が六〇〇〇麻克或はより多くの財産を有するものとして課税された。これ等の人々およびその妻子の數は總てゞ五、三五〇、〇〇〇人であつた。課税された者のうちで――

七三一、七〇〇人の有した財産は	六、〇〇〇乃至	二〇、〇〇〇麻克
二六二、三〇〇人の〃	二〇、〇〇〇乃至	三二、〇〇〇〃
二〇三、八〇〇人の〃	三二、〇〇〇乃至	五二、〇〇〇〃
一六〇、五〇〇人の〃	五二、〇〇〇乃至	一〇〇、〇〇〇〃
七九、九〇〇人の〃	一〇〇、〇〇〇乃至	二〇〇、〇〇〇〃
四三、三六〇人の〃	二〇〇、〇〇〇乃至	五〇〇、〇〇〇〃
一二、六〇〇人の〃	五〇〇、〇〇〇乃至一、〇〇〇、〇〇〇〃	
五、三〇〇人の〃	一、〇〇〇、〇〇〇乃至二、〇〇〇、〇〇〇〃	
三、〇〇〇人の〃	二、〇〇〇、〇〇〇麻克以上	

であつた(註四)。

(註四)　余は此等の數字をば、一九〇八――一九〇九會計年度に對するプロシヤ議會に提出された Vergleichende

Uebersicht から引用してゐる。それは一九〇八——一九一〇年の三年間に對して爲された査定額を示す。

この結果はどちらの國においても、所得についての結果と大體同じである。百萬長者の數は實に極めて少い、富豪の數も矢張り少い、財産が少くなるにつれて人數が增加してゐる、極く僅かの財産しか有たぬ者が最も多數である。かくして丁度どの位ひの所まで同じ傾向が續いて行くかといふことは明言できない、しかし、この表における限界以下の財産しか有たぬ人の數が、それ以上の財産を有する人の數よりも遙かに多いことは確かである。英吉利では、死後に一〇〇磅もの財産を遺した者は大人六人のうちで一人だけであり、一〇〇〇磅もの財産を遺した者は二十人のうちで一人だけであつた(註五)。プロシヤでは、六〇〇〇麻克以上の財産を有する者は人口の約七分の一であつた、七分の六は、その財産が六〇〇〇麻克以下だつたので、財産税には影響されなかつたのである(註六)。相當な額の財産を有する者は、どの先進文明國においても、その人口の小部分に過ぎないのである。

(註五) Chiozza Money 氏は彼れの Riches and poverty, pp. 51, 72, において事實を誇張してゐる——彼の注意して謂ふところによれば、死後に何等かの財産を殘す者は人口の十分の一に過ぎない。A.L. Bowley 氏が余に指摘したやうに、比例を取つて意義があるのは、總人口に對する比例ではなくて大人の數に對する比例である、大人六人のうち一人といふ比例を本文に擧げたの此の事情のためである。

(註六) 一九〇八年におけるプロシヤの總人口は三八、〇〇〇、〇〇〇であつた、財産税を課徵された一、五〇〇〇、〇〇〇人の有する家族の數は五、三五〇、〇〇〇人であつた。

第三節　合衆國における所得の分配。

合衆國については、財産の分配に對しては無いけれども、所得の分配に對しては役に立つ數字がある。所得の數字は、歐羅巴諸國の場合と同じく、主として租税報告書を基礎としてゐる。一九一三年に聯邦政府が所得税を設定してから、[1] 課税對象たる種々の所得の大さ及び人數を示す統計が發表されるやうになつた。しかし、此の新制度が適用された最初の五年間においては、その統計的結果は、若しそれを實際の分配狀態の指標として利用せんとするならば、多大の修正が必要であつた。租税の課徵および管理の總ての場合におけると同樣に、租税泉源に達するといふ點でのより大きな成功は時日が經過するにつれて得られた。この國が世界大戰で苦しんでゐた一九一八年には、當局は完全な申告を得るために特に努力し、また納税者は戰爭によつて奉公の精神を喚起されて、平時におけるよりもより容易に之に應じるやうになつた。それでさへも、報告書は多くの點で不完全であつた。この制度が實施されて來た期間はまだ極め

1) 第八篇第六十九章第五節參照。

て短かつた、しかのみならず、不適當な法令のために脱税――一部分は適法な一部分は違法な――の餘地が大分殘されてゐる。當局（the Bureau of Internal Revenue）が編纂した數字は、なるほど危懼され得るよりも信頼すべきものではあるが、それをば實際の所得分配の指標として利用せんとするには、多大の修正を整理とが必要であつた。しかし其れは、一群の有能な統計學者達の手で分析され、そして種々の他の方面からの材料を用ひて修正され且つ補充された。かくして其れは、相當に精確なものと看做され得る一摘要の土臺として役立つたのである。[1]

一九一八年における一定額の所得を有する人數は、次の如しと判斷された、――

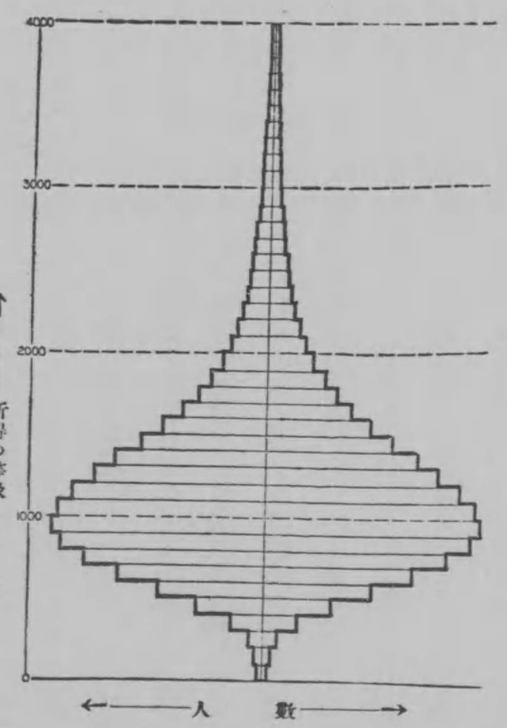
二、〇〇〇弗までの所得	三二、〇七八、四一一人
二、〇〇〇及至三、〇〇〇弗の所得	三、〇六五、〇二四人
三、〇〇〇乃至一〇、〇〇〇弗の所得	一、九七〇、九九一人
一〇、〇〇〇乃至五〇、〇〇〇弗の所得	二三三、一八一人
五〇、〇〇〇乃至二〇〇、〇〇〇弗の所得	一八、九五六人
二〇〇、〇〇〇乃至五〇〇、〇〇〇弗の所得	一、九七六人
五〇〇、〇〇〇乃至一、〇〇〇、〇〇〇弗の所得	三六九人
一、〇〇〇、〇〇〇弗以上の所得	一四五人

1) Income in the United States : its Amount and Distributton, 1909—1919. By the staff of the National Bureau of Economic Research, New York, 1921.

一般狀態を示す今一つの方法は、一方においては富裕階級の手に這入る總所得と、他方においては社會の大群の人々の手に這入る總所得との割合を示す方法である。二〇〇〇弗以内の所得を有する人々の階級は總人口の八六パーセントであつて、彼等は總所得の六〇パーセントを得てゐた。二〇〇〇弗以上の所得を有する人々は總人口の一四パーセントであつて、總所得の四〇パーセントを得てゐた。若し富裕階級とその他の人々の階級との間の分界線を三〇〇〇弗に置くならば、それ以下の所得を得てゐる人々は總數の九四パセーントであつて、總所得の七三パセーントを得て居り、一方、三〇〇〇弗以上の所得を得てゐる人々は總數の六パセーントであつて、總所得の二七パーセントを得てゐたのである。一寸變つた方法で謂へば、社會の最も富める階級たる所得享有者の最高五パーセントが、總所得の二六パーセントを得てゐた、即ち、總所得は六百五億弗だつたからして、この幸福な階級は百六十億弗を得たことになる。

次の圖はこの狀態をより詳細に表はしてゐる。この多數の平行四邊形の幅は緣に示した所得を享有しつゝある人の數を示す。各階段は所得における一〇〇弗の變動を表はしてゐる。この圖形は全く獨樂の形に似てゐる。所得享有者の數がその層において最も多いことを示してゐる最も廣い平行四邊形は、最低の平行四邊形ではない、それは九〇〇弗乃至一〇〇〇弗の所得に

對する平行四邊形である。この上下には、總て廣く、總て大人數なることを示してゐるところの、八〇〇弗乃至一二〇〇弗(ひきくるめて云へば)の所得を有する層がある。所得が大きくなるにつれて層が狹くなり、四〇〇〇弗だけの所得を有する人の數は既に僅かになつてゐる。この圖形をこれ以上に延長しなかつたのは、殆ど直ちに其れが一本の細い線になるだらうからである。その線は、若しそれをば、凡ゆる所得を最も高いものゝ所まで示すやうに同じ尺度で引いて行つたならば、長さ數千呎になるであらう。獨樂の尖端は莫大に延長され且つ極端に細くなるであらう。



かゝる論據によつて斷定を下す場合には、常に、貨幣本位および物價と貨幣所得との高低を勘定に入れねばならない。若干の制限は明白である。他の諸制限はそんなに明白ではない、それ等は、一般經濟原則の批判的適用を必要とする。

一つの明白な修正は、今世紀の初年――英吉利およびプロシヤの場合の數字はそれに就てゞある――と、一九一八年――合衆國の場合の數字はそれについてゞある――との間に起つたところの、貨幣的條件における異常な變動に關係してゐる。[1] 一九一八年における亞米利加人の三〇〇〇弗の所得は、一九一三年における一五〇〇弗以上は意味しなかつた。諸國のあひだの比較をするに當つては國際的相違を斟酌することが必要なことも、殆ど同樣に明白である。概して謂へば、例へば一九一三年における一六〇磅(約八〇〇弗)の英吉利人の所得は、その年における一五〇〇弗の、或は一九一八年における三〇〇〇弗の亞米利加人の所得と――なるほど恐らくそれだけの一般購買力を意味しはしなかつたであらうが――同じ社會的地位を意味した。一九一三年についての英吉利の數字を解釋するに當つては、一六〇磅といふ金額は、富裕階級と大群の人々との間の分界線だと認めて差支ない。また遙かにより大きな三〇〇〇弗といふ金額は、一九一八年における合衆國についての之に相當する線だと認めて差支ない。[2] 既に擧げた

1) 第三篇第二十三章第六節における此の題目に關する所論參照。
2) 同じやうに、1908年のプロシヤにおける3000麻克は、社會的意義において、1918年の合衆國における3000弗に大體相當する。

統計によつて示されてゐるやうに、またやがて引用さるべき他の統計によつてより充分に分かるであらうやうに、富裕階級の手に這入る所得の割合は、合衆國におけるよりも英吉利においてより大である。

もう一つの修正はもつと厄介な種類のものである。それは、貨幣所得の解釋と、合衆國では大きいが英吉利では其れに相當するものがないところの一階級――獨立農業者――の社會的地位とに、關聯してゐる。巨萬のアメリカ農業者の所得は、普通には、富裕線よりも遙かに低く、また、實に、勞働階級の所得の平均よりも低いやうに思はれる。余は、やうに思はれる、と謂ふ。蓋し、農業者の所得を計算する方法は、說明を要し、且つ諸々の問題を生せしめるからである。彼れ及び彼れの家族によつて消費される農場產物の代價は、彼れの所得の一部分として勘定されてゐる、そして其れは可なり大きな項目をなしてゐる。その額を測定する唯一の方法は、この農產物をば、若しその農業者が賣つて自分では消費しないならばどれだけの價格を生じるだらうか？　と尋ねることである。若しバタ、卵、果物、野菜、家禽および獸肉といふやうな彼れの農場產物が(彼れの住宅の家賃は謂はないで)三〇〇弗で賣れた筈ならば、彼れの有効貨幣所得を示すためには、彼れの直接の貨幣受取高に三〇〇弗を追加せねばならない。

しかし――そして茲において厄介な點に達する――この餘分の三〇〇弗は、諸商品において、卽ち『眞實』所得において、同じ金額が都會に住む勞働者に對して意味するよりも遙かにより多くを意味するのである。その農業者が彼の農場において三〇〇弗で賣り得たであらうものは、都會居住者にとつては遙かより多くに――平均においては確かに二倍もに――値するであらう。生產者によつて得られる價格と消費者によつて支拂はれる價格とのあひだの開きは、常に經濟學者達の驚異の源である、それは恐らく、いま擧げたやうな農場產物の場合に最も大きいであらう。だからして、農業者の所得を判斷する場合には、吾々は、國際的の比較において必要なるものに類似せる修正能因を適用せねばならない。いま假りに、合衆國の職工の貨幣所得は英吉利の職工の其れの二倍であり、また佛蘭西の職工の其れの三倍であるとしても、彼れの眞實所得は、決して其れと同じ程度でより高いわけではない。これと同じやうに、たとへ合衆國の職工の所得が合衆國の農業者の其れよりも五割だけ高くても、この兩者の眞實所得は大體同じかも知れない。世間並の議論では――殊に一國內での比較に關しては、かゝる問題は殆ど顧慮されてゐない。がそれ等は、統計を――殊に一國民の總所得、および種々の階級の間における其れの分配を示さんとする統計を――利用する場合における辨別の必要を例證する(註七)。

（註七）この修正を一四一六頁の獨樂形の圖に適用するならば、八〇〇弗（例へば）以下の所得層は其處に示されてゐるよりも遙かに狹くなり、また、八〇〇弗以上（例へば）一五〇〇弗までの所得層は遙かに廣くなるものと、考へねばならぬであらう。圖形を斯く變更するならば、『眞實』或は商品所得の分配は遙かに、より精確に表はされるであらう。

第四節　不平等は增大しつゝあるか？

もう一つの問題は、不幸等は增大しつゝあるか或は減小しつゝあるか――卽ち、往々にして申立てられてゐるやうに、金持は益々富裕に貧乏人は益々貧乏になりつゝあるか否か、といふ問題である。この問題についても吾々は大して精確な知識を持たない。しかし、吾々の手に在る材料の一般的傾向の示すところによれば、金持は恐らく益々富裕になりつゝあるであらうが、――又確かにより少く富裕になつてはゐないが、――貧乏人は益々貧乏になつてはゐない。

一八八〇年の英吉利と一九一三年の英吉利とを注意深く比較して見ると、そのあひだ（約三十年間）に賃勞働階級の平均所得は四五パーセント增加し、富裕階級（所得稅免除額以上の所得を有する階級）の平均所得は三〇パーセント增加してゐることが分つた。英國民の總所得について云へば、殆ど丁度同じ分け前が、（全く二分の一ではないが）一八八〇年におけると同樣に一九一三年にも富裕階級の手に這入つたのである。この部分は――このことは注意を要する――合衆國における之に對應する部分よりも大きい。合衆國では、今さきに擧げた數字を見れば分かるやうに、明白な富裕階級の手に這入る所得の割合は總所得の約四分の一である。二國間のこの著しい相違は、主としては、合衆國における獨立農業者階級の巨大と一般的繁榮とに起因してゐる。英吉利では――この國における變動の大勢に立歸る――富裕階級の絕對數は殆ど二倍になつたが、賃勞働階級における人數は四分の一足らず增加したゞけであつた。諸階級の間への人口の割當における最も顯著な變動は、富裕階級と賃勞働階級との間に介在する一階級――僅かの俸給を得てゐる人々、小店主、等、免從額以下の然し職人および勞働者達の普通の所得以上の所得を得てゐる人々の階級――に這入る部分の增加であつた。人口の大部分は、中間階級および富裕階級の平準にまで上ることが能きたのであつた。他方において、貧乏に殘された人々も、幾らかはより少く貧乏になつたのであつた。[1]

同じやうな大勢は略ゝ同じ時代の獨逸でも現れた。この國でも租稅統計が相當に精確な知識の源である。それの示すところによれば、獨逸でも矢張り貧乏人の所得が增加しつゝあつた。

1) 統計的技術の歎賞すべき一例たる、A. L. Bowley の研究、The Change in the Distribution of the National Income, 1880—1913(1920). 參照。

この國では、尙また、著々たる向上的變動があつた、卽ち、或る割合の人々が絕ゑずより富める階級に移りつゝあつたのである。安樂な勞働階級およびより低い中產階級はより弱くはならないでより强くなつた。この國では、中產階級が無くならうとする傾向はなく、また、減少しつゝある數の極めて富める人々によつて高い所得が完全に奪はれようとする傾向もなかつた。その時代における獨逸は英吉利よりも迅速に前進しつゝあつた、蓋しこの國は、半世紀前に英吉利が通過してしまつた階段に在つたからである。急速に起る物質的進步は、それが進みつゝあるあひだは、實業家階級したがつてまた富裕階級一般の側における特別の利得を伴ふものと、期待さるべきである。かくして吾々は、獨逸においては、より少く富める階級の條件における惡化を來たすことなしに、極めて富める階級の人々の手に所得および財產が益々集中され、而もその階級內の人數が增加する形跡を見出すのである。

合衆國については、不平等の大勢――それが增大しつゝあつたか減少しつゝあつたか――に關しては、現在の狀態に關してのようによくは知られてゐない。しかし、歐洲戰爭前の三十年間においては、發展の徑路が概して獨逸のそれに似てゐたといふことは、全く有りそうなことである。蓋し此の二國は、急速な產業的發達の同じやうな階段に在つたから。多數の人々は、著しく大きな財產が蓄積されるのを見て、不平等が遙かに甚だしくなりつゝあるものと考へた。しかし、此の國は廣大であり且つ其の人口は巨大である。中產階級に――その下層にであるか上層にであるかは別として――屬する人々は、なるほど極めて富める人々のやうに目立ちはしないが、極めて多數である。百萬長者の數および所得は、或は、單に富める若しくは富裕な人々の數および所得よりも迅速に增加したかも知れない。蓋し最高の階級は、啻に大規模產業への近代的傾向の作用によつてのみならず、合衆國の會社の特殊狀態によつても、私營產業の範圍の擴張によつても、物質的進步の異常な步調によつても、膨張したからである。また、移民の流入のために最低階級が壓迫されて、この階級は他の諸國におけると同じ程度には一般的進步に與ることができなかつた、といふことも有りそうなことである。しかし、合衆國に現れた特殊の諸能因の結果について人々がどう憶測しようとも、變動の本線が、同じやうな產業的特色を有する諸國の其れと違つてゐたとは考へられない(註八)。

(註八)　獨逸の數字によつて示された分配上の傾向については、Zeitschrift d. Preuss. Statist. Bureau, 1904, p.92, and passim. における Adolf Wagner 教授の有名な論文參照。彼れの結論は Robert Meyer によつて、Handwörterbuch der Staatswissenschaften, Vol. III, p. 668 (third edition, 1909). において確められた。Sombart, Deutsche Volkswirtschaft im 19. Jahrhundert, p. 506. 參照。

一般的傾向を數學的に表はさんとする Pareto 教授の有名な提案は、彼れの Cours d'Economie Politique, Vol II, Book III, Chapter I.にある――そこにはまた種々の源からの數字がある。が其れは、A. C. Pigou, The Economics of Welfare, PartV, Chapter II. において嚴重な批判を受けてゐる。

第五節　不平等の原因――天稟の相違、機會によつての、殊に相續によつての、既得便宜の維持。

不平等に關する明白な事實は斯くの如くである。それは如何に説明さるべきであるか？　また如何に――若し假りにも辯明され得るとすれば――辯明さるべきであるか？

不平等の原因は二つに還元し得る――その一は、天稟の相違であり、その二は、環境によつての、および財産の相續によつての、既得の便宜の維持である。不平等の源は、人々の器量（エンドウメンツ）の不平等に見出される筈である、そして其れは、財産と機會との相續の影響によつて、且つまた、先祖から子孫に遺傳された生得の才能の繼續的影響によつて、永續するのである。

疑もなく最初には、凡ゆる相違は或る人々の他の人々に對する生れつきの優越から生じたものである。野蠻人の酋長は、腕力においても智力においても其の部下より秀れてゐる。歴史を一貫して、力强く且つ才能ある者が前面に立つてゐる。かゝる人々は、文明社會の平和的競爭においても矢張りそうしてゐる。今日の社會では、勞賃の――卽ち、あらゆる種類の勞働からの所得の――相違は、少くとも大きな程度において、器量の相違の結果である。現代におけるその著しい例は實業家の場合である。殊にその上層においては、高い天賦の才能が、實業家階級のうちでの幸運な少數者の例外的な收入を説明する。他の識職業においても、なるほど訓練および環境も大きな影響があるが、勞働からの最大所得を説明するためには天稟が矢張り支配的に重大である。

しかし、社會の發達の極く初期においては、相違を生じる此の本源的原因が、確立された便宜の永續によつて制限されて居り、往々にしては廢除されてゐることがある。封建制度においては、また世襲的階級制度を基礎として組織されてゐるどの社會においても、不平等が嚴重な法律の力によつて維持されてゐる。自由であり競爭的だと考へられてゐる現代の社會においても、便宜は矢張り存續する傾向がある。そして便宜が存續するには二つの方法がある――その一は環境および機會の影響によつてゞあり、その二は財産の相續によつてゞある。

環境と機會とについては既に考察した。[1] なるほど社會的成層が、どの程度まで人爲的便宜に基いて居り、どの程度まで諸々の階級の天賦の道德的および智的資質に基いてゐるか、といふことは確かでないが、しかし人爲的原因が大きな役割を演じてゐることは明かである。人々は、數多の勢力のために、自分の兩親の社會的等級に引續いてゐる傾向がある。それ以上に容易に昇るのは例外的な天分を有する人々のみであり、それ以下に落ちるのは例外的に天分の足りない人々のみである。

しかし乍ら、より重大なのは、直接の財産相續である。その影響は莫大である。資本、土地、所得を生じる凡ゆる種類の財産、から得られる所得の永續を說明し、且つ斯くして、有産階級と無産階級との間の大きな間隙を說明するものは、明かに之だけである。それは尙また、すべての社會的成層線を强大にし、且つ慣習や習慣の勢力を加勢する効果がある。財産を相續した人々は機會をも相續する。彼等は、よりよき出發點、より刺戟的な環境、より高い野心、を有する。彼等は恐らく、より高い所得を獲得し、そして、晩婚と少數の子供とによつてより高い生活標準を維持するであらう。相續制度は、社會的成層をば、その直接の影響によつてと同じく其の間接の影響によつても、助長するのである。

1) 第四十七章參照。

近代社會を支配してゐる者――金儲け實業家――の地位ほど、天賦の才能、財産の相續、および永續せる環境、の結合せる勢力を充分に例證するものはない。どの實業家の生涯においてもその最初の階段では、資産を有つてゐるといふことが大きな力になる。最初の階段を過ぎると天賦の才能が益々功を奏する。とにかくどんな方法で出發したとしても、産業の指導者は富を得て財産を貯へる。そして、彼れが蓄積するにつれて、更に益々大きな財産によつて都合よくなる。彼れが死ぬる時には子孫を殘すのであるが、その子孫は恐らく才能を傳承し、且つ殆ど確かに財産を相續するであらう。財産と共に彼等は、新たなる環境と新たなる機會とを相續する。なるほど其の財産は、節約をしないため或は判斷力が無いために蕩盡されるかも知れない、或は、相續者達のあひだに分配されて僅かになるかも知れない。しかし、斯かる結果は孰れも有りそうなことではない、また假りに其れが起つたとしても、その子孫は、より貧乏な階級――彼等の先祖は此所から身を立てたかも知れないのであるが――の人々とは甚だしく違つた野心と環境とを有する。とにかく不平等は、たとへ其れが最初には人爲的恩惠によつて生じたものではないとしても、一旦生じた以上は相續および環境によつて永續する傾向があるのである。

第六節　相續は私有財産制度の下で資本を維持するに必要かぐべからざるものとして辯明さるべきである。

不平等を維持するために極めて力強く作用してゐる財産相續は、何と謂つて辯明され得るか？

相續は、歴史的には、家族の統一の意味から生じたものである。古代における先祖は、財産の直接所有者であるよりは、寧ろ、財産を所有せる家族の首長にして代表者であつた。生き殘れる成員への其れの轉下は、所有權の移轉ではなくて、引續いての所有者達の新しい代表者への讓渡であつた。しかし、相續のこの説明は、なるほど歴史的には充分であるが、現行の相續制度を説明するためには殆ど役に立たず、況んや其れを辯明するためには尚更ら役に立たぬのである。今日相續を保護すべき理由は、打明けて云へば功利主義的である。私有財産制度を基礎として組織された社會においては、相續は、資本を維持するために必要かぐべからざるものである。

蓄積の最初の階段では相續がどの程度まで必要か、といふことは未決問題かも知れない。金儲けに、そして貯蓄および放資の初めの階段に導く動機は多種多樣である――啻に自分自身および自身の系累者達のための將來の保護のみならず、社會的野心、卓越の愛着、活動および支配に對する衝動もそれである。しかし乍ら、蓄積を持續し放資を永續する主動機は、家庭的愛情および家族的向上心である。安樂に暮せるだけの財産の遺贈は、なるほど往々にしては子孫にとつて喜ぶべき贈物が悲しむべき贈物が迷ふことがあるけれども、それは、先祖がその財産を作り上げる主因である。若し相續制度を廢止して、死亡の際は全財産が社會に歸屬さるべきものと定めたならば、財産の所有者は普通には其れを濫費するであらう。財産を最初に獲得するための動機の一つは、そして其れを維持するための主たる動機は確かに、無くなるであらう。何の故を以て、社會一般の利益のために蓄積し且つ放資するか？

之は、相續税は一定の限界を超ゆべからず、といふ主張の根據である。後に述べるであらうやうに、死亡に際しての財産の讓渡は、租税を課徴し且つ累進率を適用する好機會である。[1] しかし、斯かる租税は資本を侵害する傾向がある。相當の限界内に保たるゝに非ざれば、それは、所得からではなくて財産の原本から支拂はれる。そして個人の『資本』のこの減少は、恐ら

1) 第八篇第六十九章第六節、および一般に、累進税に關する第六十八および六十九章の所論參照。

く、社會資本の之に相當した減少を生じるであらう。それどころではない、それが益々高くなり且つ益々沒收に接近するにつれて、資本の本源的蓄積が抑制される恐れが益々甚だしくなるのである。

第七節　租稅その他の方法による相續の制限。

かく謂へばとて、相續に制限を加へてはならぬといふ結論にはならない。確かに、相續制度の實質的效果を影響しないやうな、或る種の制限を加へることができる。また、なるほど資本を減少させるかも知れぬが其れに匹敵する利益を齎し得るやうな、制限方法もある。卽ち斯かる方法は、不平等を減少することによつて、物質的損失を償つて餘りある社會的利益を齎し得るのである。

無遺言相續を最も遠い親族にまで無限に認むべき理由は何もない。或る人がわざ〳〵遺言をしなかつた場合には、彼れの財產は遠い相續人のことを考へて蓄積されたものではない、と推定するのが至當であらう。社會が斯かる思ひがけない獲物の大部分を――その全部をすら――沒收したからとて、彼れの蓄積も他の人々の蓄積も、そのために阻止されることはないであらう。同じやうな理由により、相續稅をば、遺言の有無を問はず被相續人に對する親等が遠くなるにつれてより重くすることは至當である。

久しい以前にヂヨン・ステユアト・ミルは、之と違つた、そして之とは目的を異にする一つの提案――卽ち、一人の相續人或は受遺者に移轉さるべき財產額を制限すべしといふ提案をした。遺贈或は相續によつて、或は生存者間の贈與によつて、或る人が獲得し得る最高額を定めよう。その額は百萬弗に定めてもよく、それより遙かに少くても又幾らか多くてもよい、精確な額は社會一般の輿論が、久しく續く不平等に我慢しがたくなつた程度によつて定まる筈である。この重大な制限の範圍內では、成功せる金持は、自分の財產を自由に處分することができる。彼れは其れをば多數の者に分け與へることもできれば、公共事業に多額の金を出して自らのために記念碑を建てることもできる。自分の財產をこの程度にまで自由にすることを許されてゐるから、彼れは――この提案の辯護者達は考へる――生存中に其れを浪費するやうなことはないであらう。そこで資本の蓄積は阻止されないであらう。しかし極めて大きな財產の移轉と大富豪の永續とは防止されるであらう。かくて、最も大きな且つ最も著しい不平等は終りを告げるであらう。

この提案の論據は不確實である。なるほど、金儲けの動機は、それ自身が力強いものだからして、限りなき財産を何等かの方法で自由に處分し得るわけであれば依然として刺戟されるであらう。しかし、直接の子孫に移轉し得る財産額が制限されるといふことは、往々にして、その所有者の生存中の濫費を助長することがあるかも知れない。尤も、吾々は後ろいて、永久的財産の極端な不平等は、啻にそれ自體が禍であつて福祉の最大の可能を害するのみならず、その謂ゆる幸運な受益者にとつても概して危險である、といふことを反省せねばならない。尙また、かゝる濫費によつて資本が失はれても、それは、どこか他の所で蓄積が增加して容易に償はれるだらう、といふことも考へねばならない。既に注意したやうに、[1] 近代社會では、蓄積および貯蓄を促がす諸勢力が急速に進行してゐて、恐らく、社會の物質的裝備を形成するための資金が豐富に、否なむしろ過剩に供給されるらしく思はれる。（だからして右のやうな制限を加へても）なるほど少數の大財産は無限に大きくなることが出來なくなるかも知れないが、巨大量の貯金が以前の通りに行はれ、そしてその總計においては恐らく充分な資金を供給するであらう。社會の失ふところは得るところよりも多くはないであらう。

1) 第三十九章第六節參照。

第八節　相續の根本的制限の提案。

その性質においてより根本的であり、その實行において全く別種の手段を必要とする提案は、遺贈財産をば何代かの後に全く社會に沒收せんとするものである。或る伊太利の學者が一つの新奇な且つ工夫な案を發表した。[1] それは、相當な免稅額以上の全財産に適用さるべき階段的課徵方法を提案してゐる。例へば、財産の（卽ち、免稅額以上の殘額――『課稅』額の）三分の一を第一回の移轉に際して國家が沒收し、他の三分の一を第二回の移轉に際して沒收し、その殘りを第三回の移轉に際して沒收してしまはう。所有者（遺贈者）は、どれだけの總額を處分しようとも、どれだけの人數に處分しようとも、自由である。第一回の移轉の後では、そして恐らく第一代のあひだは、財産の大部分が矢張り受益者の手に殘るであらう。第二の階段では、受益者の手に殘る部分が減少するであらう、そして遂に第三の（或は選定される階段の數に應じて第四または第五の）階段では、全部が社會の手に歸するであらう。この提案は、遺贈者は孫よりも子の身の上をより多く案じ、より遠い子孫の身の上は段々より少くしか案じないものと、假定してゐる。自分の財産の大部分がその繁榮を念慮する人々の手に移り得る限りは、彼

1) E. Rignano, Un socialisme en harmonie avec la doctrine économique libérale (1909). その佛譯は余の見たる唯一の譯である。この提案は H. Dalton, The Inequality of Incomes, Chapter IX によつて說明され且つ考察されてゐる。

れは其れに手を觸れずに置くであらう。遠い子孫の特權が廢止されても、彼れに影響はないであらう。

之と考へ方が同じであつて、原理上の同じ諸問題を伴つてはゐるが稍ゝ趣を異にするのは、相續によつては只だ一系列の一代限りの權利のみしか移轉させないといふ案である。遺言者をして、自由に自分の財産の所得を二人、三人、四人の――何人でも實際に自分が必要とするだけの數の――生存者に遺贈せしめよう。しかし其後は社會が全部を沒收しよう。

すべて斯かる提案について注意すべきは、それ等は必然に、その實行の初期の階段において、公の權力によつての財産の支配いな寧ろ管理を必要とするといふことである。なるほどそれ等は、最初の致富者をして大財産を作り上げさせる諸勢力を引續き作用させることには、成功するかも知れない。しかし其等には、明かに、その後の受益者達をしてその財産に手を觸れさせずに置くだけの力はない。數人の相續人、殊に一系列の最後の相續人は、自分の手に殘つてゐるものを濫費したくなるであらう。だから國家は、その殘額の無傷を保證するためには、その元本を管理しなければならない。若しそうしなかつたら、恐らくは確かに、個々人の手に在る資本金と、それに相當する社會の物質的設備とが段々に消滅して了ふであらう。

國家が斯かる損失のないやうに監督するといふことは、全く考へられぬことではない。或る官廳を設けて、目的財産の管理をさせることができる。その官廳はそれ〳〵の受益者達に、定められた持分に應じて年々の所得を支拂ふことができる。そしてその官廳は次第に、段々とより大きな財産の所有者となつて、その財産をば産業管理者達に貸付けることができるであらう。産業の私的管理は、恐らく斯かる仕組の下でも行はれるであらう。そして大財産の蓄積が――巨富の蓄積さへも、矢張り續いて行はれるであらう。しかし、富める有閑階級が數百年に亘つて存續するといふことは、なくなるであらう。

或る適當な官廳――これが肝要である。政府の普通の財政的活動とは完全に分離されてゐるところの、或る巨大な且つ精巧な組織、有能にして高潔な終身官を以て組織された官廳がなければならない。そして茲において吾々は、あらゆる社會改造案に伴ふ困難に當面する。社會は、提出された仕事をうまくやつて行けるだらうか？　社會は、必要な知識と自制とを有つてゐるだらうか？　官吏の手に這入つて來る大きな資本が巧みに處理されるものと期待するに足る根據があるだらうか？　財政史の示すところによれば殆ど望みはない。國家の手に這入る資本金は、普通には國家自身によつて『借用』されてゐる。それは、或る省または局の手に渡さ

れ、そして消費される。ところがその貨幣額は濫費されるのである、永續的の物質的利益は何も生ぜず、精神的利益に至つては猶更何も生じない。なるほど、その貨幣額を讓り受けた官廳が其れを有利に――例へば有益な公共事業、必要な住宅計畫、大きな教育機關に――消費する方法を案出することは容易である。しかし、普通の支出徑路における其れの濫費を防ぐことは仲々容易ではない。國庫は個人と似てゐる。或る個人が困難な仕事によつて稼いだものは、彼れは恐らく注意して守り、仕舞つて置き、放資するであらう。ところが偶然に手に這入つたものとなると、彼れは恐らく、殆ど無分別に、そして多分は大陽氣で消費するであらう。之と同じく、國庫が、造作なく思はれるところの、また其時一寸は大多數の場合に全く造作がないところの、方法で得たものは、あらゆる道樂事業に無分別に充當され勝ちである。ところが頗はしく思はれる租稅方法で獲得した貨幣額は、遙かに批判的に且つ賢明に充當されるであらう。個人の場合にも國庫の場合にも、容易に得られた利得は手輕く消費されるのである。

また、若し假りに、相續財產の漸次的沒收によつて獲得された資本金が嚴重に維持されて放下されるとしても、その放下は如何に賢明であらうか？　アメリカの實業家は、任命された官吏によつて選び出された借手達に數百萬いな數十億もの金を貸す大官廳――事業上では貸

終